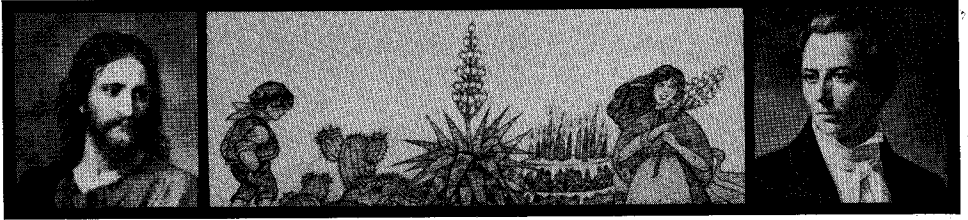


聖徒の道

12 1981





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
デザイナー：
ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・ブライス

も く じ

ナザレのイエス	スベンサー・W・キンボール	1
主を敬う	ジョン・ソーンダース・ ランドバーク	9
祈り続けなさい	H・パーク・ピーターソン	10
兄が示してくれた愛	D・プレント・コレット	16
真夜中の警告	イザベル・ハンソン	21
質疑応答		22
バーバラ・B・スミス： 奉仕の召し、喜びの時	ジョアン・ジョリー	27
心はずむ扶助協会	パトリシア・W・ヒグビー	33
アロン	ビクター・L・ラドロ	36
クリスマスプレゼント	レイン・H・ダーデン	44
あるイギリス海軍兵の冒険 第II部	ウィリアム・G・ハートリー	48
予言者のクリスマス		54
クリスマスの ホースラディッシュ	テッド・シール	56
アントニオのろうそく	バージニア・G・ジョーンズ	60
ローカル・ニュース		62

聖徒の道 12月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

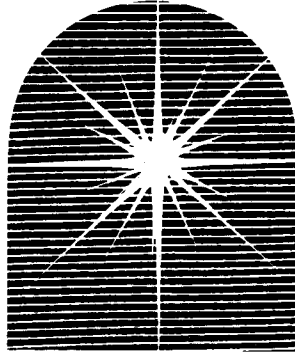
配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定価 年間予約2,200円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0642 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



ナザレのイエス

大管長 スペンサー・W・キンボール

— 年のこの季節に、私たちは主イエス・キリストの誕生を祝います。数年前、キンボール姉妹と私はハワード・W・ハンター長老御夫妻と共に、聖地を訪れました。そこでのクリスマスイブに、私たちは世界中から集まった何千という宗教家やキリスト教に興味を抱いている人々と行動を共にしました。私たちは身をかがめながら小さな入口を通り、キリスト降誕の聖堂に入りました。そうして徐々に、いくつかの教会によって飼葉おけのあった救い主誕生の聖所と言われているほら穴へと進んで行きました。

そこに立ち止まってコンクリートの床に埋め込まれた金属性の星を見ていると、いつの間にかその星は消えて、ほら穴の中には粗末な飼葉おけが見え、そのそばには、産着にくるまれた幼子をやさしく見守る美しい女性がいるような気がしました。幼子

はすでに産湯を浴び、塩で体を清めてもらってから、四角い布の上に置かれていたのでしょう。その布は幼子の両脇に巻かれ、足のところで上の方に折り返され、そのまわりは新生児用の帯でやさしく結ばれていたと思われます。両手は脇にしっかりつけておかれたのですが、時々布を解かれ、体にオリーブ油を塗ってもらったり、ギンバイカの葉の粉末をはたいてもらったりしたに違いありません。そのようなおくるみの中でじっとしていたのであれば、エジプトへの旅の時にも世話がかからず、幼子はそのまま母親に背負ってもらうこともできたでしょう。

幼子イエスの誕生は何と喜ぶべきことでしょうか。しかし実際、私たちはイエスのなされた様々な経験以上に、このイエスの誕生を大切なものとしてとらえているのでしょうか。私たちの生活の中で、誕生は最大

の出来事となっているのでしょうか。私たちは自分の生まれてきたわけを、自分の誕生の意味を問うてみる必要があるのではないのでしょうか。

これまでに、無数の人々が生を受けてきました。

カインが生まれました。しかしその最期をどのように終えたかは不明です。彼ほどのような生涯を送ったのでしょうか。

ネロが生まれました。しかし彼の生涯は決して正当化されるものではありませんでした。

アドルフ・ヒトラーが生まれました。彼の生涯はどうだったのでしょうか。大勢の人人がダハウ（西ドイツ、ミュンヘン付近のナチス捕虜収容所）や他の拷問室で餓死していきました。

確かに、人は死にます。すべての人が死にます。大勢の人が、名声を得ることも賞賛されることもなく、人知れず死んでいきました。では、彼らはその創られた目的を満たして死んでいったのでしょうか。確かに、人の死や死ぬ時期はそれほど重要なことではありません。しかし、人は罪のあるまま死ぬようなことがあってはならないのです。ノアの大洪水以前の多くの人々は、洪水にのまれて罪のあるまま不名誉な死をとげました。

キリストの死、この死こそ重要な意味を持つ偉大な死です。キリストは、復活の道を備えるために、また完成への道を示すために、そして昇栄への道を教えるために、私たちの罪の贖い主となって亡くなられました。キリストは目的を持ち、自らの意志で亡くなられたのです。貧しく生まれながら、キリストの生涯は完全なものであり、その模範は人々の賞賛を集めずにはいませ

んでした。キリストの死を通して道が開かれ、すべての人々にあらゆる良き祝福、賜が与えられることになりました。

キリストは、恐らくもっと早く亡くなり、御自分に求められている第一のこと、つまり復活と不死不滅を達成することができたはずです。しかし、完成への道を確認たるものとするために、たとえ危険に満ちた人生であっても、長く生きなければならなかったのです。

30年以上もの間、イエスは危険に身をさらしながら生活されました。ベツレヘムの幼子をすべて殺すようにという恐ろしいヘロデの命令に始まり、ピラトによって無慈悲にも残虐な群衆に引き渡されるまで、イエスの身には絶えず危険がつきまといました。そして最後には銀貨30枚という報奨金がつけられたまま、危険に満ちた生活を余儀なくされました。イエスをそのような生活に陥れようとしたのは、イエスに敵意を抱いている人々だけではありませんでした。友でさえイエスを見捨て、サタンとその仲間たちはたえずイエスにつきまとったのです。しかし、若くして亡くなられた後も、イエスは弟子たちをもっとよく訓練しないうちは地上を去ることができないと思われたのでしょうか。イエスは40日間地上に留まり、使徒たちを指導者として訓練し、人々を聖徒としてふさわしくあるよう教えさせられました。

イエスの生涯を見てみると、予言の成就を見る思いがします。予言の通り、イエスは「悲しみの人で、病を知って」（イザヤ53：3）おられました。イエス御自身、喜びだけで悲しみを経験されなかったとしたら、いかに人々を立派に導き、私たちに主の戒めに従う方法を示すことができたでし

ようか。だれかが、なし得ることを証明しなければ、どうして人間が完全になれることなど理解できるでしょうか。そこで、イエスはその全生涯を、日夜試練に立ち向かいながら歩いて行かれたのです。

しかしイエスの日々の生活は、イエスの力と能力、強さを立証するものでした。誕生の時から、イエスの生涯は試練に満ちたものでした。何の設備もない、普通のイスラエル人の家庭にあるような飼い葉おけの中でお生まれになったイエスは、招かれざる客でした。客間には彼らのいる余地がなかったのです。(ルカ2:7参照)

幼くして、イエスは尊い命を守るために遠い国へと連れ去られねばなりませんでした。それは恐ろしい急を要する危険な旅でした。まだ母の乳を飲んでいたと思われる幼子にとっては、辛く苦しい旅だったでしょう。旅の途中には砂嵐もあったでしょう。疲れも出たでしょうし、食事や習慣の違いもあったことでしょう。異郷の地でいろいろな困難に出会ったに違いありません。ナザレへの旅はこれよりさらに長く厳しいものでした。これもまた冷酷な支配者から逃れるためのものでした。

イエスの試練はとどまることがありませんでした。イエスの兄弟ルシフェルは、イエスがわずか12歳の少年であった時に語った言葉を聞いていたに違いありません。イエスはこのように言われました。「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか。」(ルカ2:49)それから、イエスをつまずかせようとするサタンの試みが始まったのです。前世におけるふたりの出会いは、同じ条件下にありました。しかし、年若いイエスに比べ、今やサタンは熟練していました。サタンは巧みに



けしかけ、力を伸ばしていこうとする救い主を滅ぼそうと企てました。

しかし彼のいかなる要求も、頑強に拒否されてしまいました。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4:10)

イエスの生涯は、どんなに孤独な寂しいものだったでしょう。イエスにはもはや個人としての生活などというものはあり得ませんでした。奇跡を行なうたびに、イエスはいやされた人々にこう言われました。「何も人に話さないように、注意しなさい。」(マルコ1:44)しかし、イエスの祝福と御力を受けた人々は出て行って、そのことを広く人々に伝えたのです。そのため「イエスは、もはや表立っては町にはいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられ」(マルコ1:45)しました。

イエスの語る言葉はどれも反駁され、「なぜ断食しないのか」「なぜ弟子たちは清くない手で食するのか」「なぜ病人を癒して安息日を破るのか」といった原則の一つ一

つを弁護しなければなりません。指導者たちは、安息日に病人を癒したことで、イエスを殺そうとしたのです。

イエスを敵視する人々にとって、それはイエスをつまづかせる十分な理由となりました。イエスの友でさえそうでした。このように記されています。「イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。」(マルコ 3 : 21)

イエスはどこに情けを求めることができただしょうか。御父からの個人的な慰めを受けるために、だびだび山に登られたのはそのためだったのでしょうか。イエスは信頼できる人もなく、行く所もないまったく孤独な寂しい状態の中にありました。イエスはこのように言っておられます。「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない。」(ルカ 9 : 58) こうしてイエスが丘へ登られると、その後には人々が続きました。海を渡られると、そこには群衆が待ち受けました。また船の中で横になっていれば、「わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」(マルコ 4 : 38) と荒々しい批判的な言葉でたたき起こされる始末です。

また死に向かって歩いておられる時でさえ、御自分の選んだ十二人の使徒たちにこのように言わなければなりません。「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それなのに、あなたがたのうちのひとりには悪魔である。」(ヨハネ 6 : 70) それからの毎日を、イエスは裏切り者と共に歩まれました。

死が間近に迫っていることを知りながらの逃亡、そしてその日を待つイエス。どんなにか孤独で不安な日々だったでしょう。イエスはユダヤ人たちが自分を殺そうとし

ていたので、ユダヤを巡回しようとはされませんでした。(ヨハネ 7 : 1 参照)

イエスは身分を隠して行こうとされました。しかし隠れていることができませんでした。(マルコ 7 : 24 参照)

イエスが最も心を痛めたのは、郷里に帰られた時です。イエスを迎える何の祝事もなく、待ち受けていたものは人々の好奇心と否定的な態度だけでした。「この人は大工ではないか。マリヤのむすこで……」(マルコ 6 : 3) どこにでもいるひとりの少年というのが人々の見方でした。

イエスはその身に報奨金をつけられ、常に身体の危機に直面していました。人々は、刑に処するためにイエスの居場所をつきとめるよう命じられました。死の影はイエスの前に後に、そしてイエスと共についてまわりました。たったひとりでいぢくの木を枯らすことのできるイエスが、御自分の敵に対してのろいの言葉を抑えることは、どんなにかむずかしかったに違いありません。しかしイエスは彼らのために祈られました。抵抗し、仕返しをするのは人の常です。主のように無礼を受けて立つことは神の業と言えるでしょう。イエスは絶えず試されました。すでに知っていた裏切り者の接吻を受けた時も、イエスは抵抗しようとはされませんでした。邪悪な群衆に捕らえられた時も、イエスは忠実な使徒ペテロに御自分を擁護させようとはされませんでした。その忠実な使徒ペテロは、実際命をかけてもイエスを守ろうとしたのです。

命じさえすれば、天の使いたちを十二軍団以上もつかわすことができたにもかかわらず、イエスは身をゆだねられ、そばにいた勇敢な使徒たちに、御自分の弁護をひかえさせられました。そしてイエスは何の抵

抗もせずに、虐待を受けられたのです。「汝の敵を愛せよ」(マタイ5:44)とは、イエスのみ言葉ではなかったでしょうか。

人々が顔につばをはきかけた時も、イエスは気持ちを抑えて、静かに威厳を保って立っておられました。終始心穏やかでした。人々はイエスにつらくあたりました。しかし、イエスの口から怒りの言葉は何ひとつ出ませんでした。人々はイエスの顔や体を打ちました。それでもなお、イエスはおびえることなく、確固として立っておられました。

イエスはもう一方のほおを向けて打たれることにより、御自分の教えを文字通り実行されたのです。それでもイエスは決してすくむことがなく、拒否することも反駁することもなさいませんでした。報奨金目当ての証人たちが、イエスについて偽りの証言をして支払いを受けた時でも、イエスは彼らを非難されることはありませんでした。彼らがイエスの言葉を曲解し、その意味を誤って解釈していても、イエスは心乱さず、心穏やかでした。「迫害する者のために祈れ」(マタイ5:44)とは、イエスのみ教えではなかったでしょうか。

地上でただひとり、この世とそこにあるすべての物を創造された方、後にそのために御自分が売られることとなった銀貨の銀を作られた方、とぼりの両側から御自分の擁護者をつかわずにこの世にきた方は、じっと忍耐され苦しみを受けられたのです。

「バラバをゆるしてくれ」(ルカ23:18)とバラバの釈放を求めて叫ぶ人々に対して、イエスは何も言われませんでした。彼らが「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」(ルカ23:21)とイエスを殺すように叫んだ時でさえ、イエスは憎しみや非難の



言葉、悪意ある言葉をかけようとはされませんでした。ただ心穏やかにしておられました。これは神としての威厳、力、克己心、つつましさを表わすものです。群衆の「バラバの代わりにキリストを！」という叫びにバラバは許され、キリストが十字架にかけられました。最悪の者と最善の者、義人と悪人、聖なる者が十字架にかけられ、墮落した悪人が許されたのです。しかしなお、イエスは恨むことも、悪口を浴びせることも、非難することもなさいませんでした。

イエスの試練はなおも続きました。無実がはっきりしているにもかかわらず、イエスは罰せられました。悪意ある人々が、純粋な聖い御方、神の御子をむち打ったのです。イエスのただひとと言で、敵対するすべての人々は地に倒され、無力になったはずでしょう。彼らは皆滅び、ちりや灰と化したことでしょう。にもかかわらず、イエスはじっと苦痛に耐えられました。

そして、いばらの冠。どんな苦痛があったことでしょう。それでもなおイエスはあ

のような素晴らしい落ち着きを保っておられました。あのような素晴らしい力を、心を抑える力を備えておられました。それは想像を絶するものです。

いばらで傷ついた傷口から流れ出る血、その血を人々は待っていたのです。彼らはこのように言ったのです。「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい。」(マタイ27:25)もはや何も彼らを止めることはできませんでした。彼らは流血に飢えかわいており、その欲望を満たそうとしていたのです。はりつけはそれを満たすものでした。しかし彼らはまず加虐的で残酷な欲望を満たすために、イエスの神聖な顔に汚れたつばをはきかけたのです。

そして彼らは、傷ついて血のにじんだ痛ましいイエスの体に、はりつけにするための重い十字架を背負わせ、運ばせようしました。彼らの強じんな背中には何も乗せず、彼らはただ、汗を流して重い十字架を引きずりながら運んでいく無力な犠牲者を見つめるだけでした。イエスは本当に無力だったでしょうか。天の十二軍団の使いたちは、まだイエスの命を受けていなかったのではないのでしょうか。したがって天の使いたちはまだ剣をさやから抜いていなかったのではないのでしょうか。天の使いたちの苦悶を知りながら、イエスは御自分を援助し、助けに来るのを止めておられたのではなかったでしょうか。

イエスはただひとり進んで行かれました。イエスの柔らかな、震える手足の肉に釘が打ち込まれます。苦痛は増していきます。十字架が穴の中に立てられ、手足の肉が裂けます。何という苦痛でしょうか。さらに、体が地面に落ちて生き返ることのないよう

にと、手首にも釘が打ち込まれました。

野次馬たちがそばを通り、意地悪そうな目でイエスを見上げながら様々な悪態をつき、嘲弄していきました。「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。」(マルコ15:31)

体に傷やあざもなく、もとの完全な状態で十字架から降りて来ることのできた主にとって、それはどんなに大きな誘惑だったのでしょうか。またどんなに大きなチャレンジだったでしょうか。しかし、イエスは決心し、御自分に与えられた使命に直面して苦しみの中に血の汗を流されたのです。その使命とは、前進し、あらゆる侮辱を耐え抜いて死を迎え、まさに御自分を苦しめた人人やその子孫たちに、忠告に聞き従う時に生命をもたらすというものでした。

今や、年若くしてこの世の生活を終えようとしているイエスは、自らの心を抑え、人々に御自分の力を「示そう」とする誘惑を克服されました。荒野で、山頂で、神殿の頂きでイエスを試そうとしたルシフェルは、自分の手下どもを扇動するのにやっきになったに違いありません。彼らは同じような策略を使い、同じような言葉をはいています。「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい。」(ルカ23:37)十字架にかけられた泥棒は、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」(ルカ23:39)と言ってイエスをあざけりました。あたりは、イエスを迫害することなど罪とも思っていないような人々で取り巻かれていました。刺しゅうの施された長い衣服に身を包んだごう慢な説教者、品位を落とした俗悪な指導者たち、彼らもまた怒号し、わめき立て、嘲弄しました。

こうして最期の時が来ました。大勢の人に囲まれながらもイエスは孤独でした。助けに行こうと待機している天の使いたちと共にありながらも、イエスは孤独でした。心からの同情を寄せながらも、御子が流血の曲がりくねった道をひとりで歩かねばならないことを知っておられた御父と共にあっても、なおイエスは孤独でした。孤独なまま、死を前にして熱っぽい体で力尽きようとしているイエスはこう言われました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか。」(マタイ27:46) イエスは苦き杯を飲む力を求めて、ひとり園に行っておられたのです。

イエスは「敵を愛せよ」(マタイ5:44)と言われました。今やイエスは、人が自分の敵をどれだけ愛せるものかを示して下さいました。イエスは、御自分を釘で打ちつけた人々のために、十字架にかかれたのです。イエスは死に臨んで、いまだかつてだれひとり経験したことのない苦痛を味わわれました。それでもなお、このように言われたのです。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)これが最後の言葉、最後になされたことでした。御自分を殺そうとした人々、御自分の流血を叫び求めた人々を許すとは何と素晴らしいことでしょう。イエスはこう言っておられます。「迫害する者のために祈れ。」(マタイ5:44)ここで、イエスは彼らのために祈られたのです。イエスの生涯は、み教えの完全な模範でした。「それだから……あなたがたも完全な者となきなさい。」(マタイ5:48)これは私たちに對する戒めです。イエスは、命と死と復活をもって、私たちに確かにその道を示して下さいました。

完全になるためには、復活と命、死が重要な意味を持ちますが、誕生もまたそうです。これを心に留めて、再び思いをベツレヘムに、現在のベツレヘムに向けてみましょう。私たちのグループは、他の大勢の人人と押し合いへし合いの状態で動き回りました。そして危うく人々の体や顔の波にのみこまれそうになりました。そのような中で、私たちがそこを訪問した神聖な目的に思いをはせることは、とても困難でした。実際、その丘の上には、私たちに敬虔さをかき立たせてくれるものや、ひとり思いにふけりたいと思う気持ちを満たしてくれるものは何もありませんでした。

私たちはタクシーに乗り、羊飼いの野を見渡せる丘にやってきました。小さな谷間を見下ろすと、そこにはポアズとルツの畑があります。そして眼前には、かつて羊飼いたちが羊の番をしていた起伏に富んだ土地が広がっています。丘の頂きには、その小さな谷へと続くほら穴があります。伝説にあるように、羊飼いたちはそこで寝泊まりし、あの記念すべき夜を見守っていたのです。入口の広いそのほら穴は、羊飼いたちを夜の寒さから守ってくれました。そして羊飼いたちはほら穴から羊の群れを見守ることができたのです。ベツレヘムの近くで私たちだけになれた唯一のその場所で、私たち4人は谷間を見つめ、そして暗やみの中に立ちながら、羊飼いたちがしたように星空を見上げました。

あの晩、天の軍勢は賛美の歌を歌わなかったでしょうか。私たちも、心の奥底に浸み入る調和のとれたかすかな調べを聞いたような気がしました。忘れられない美しい調べ、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人

人に平和があるように」(ルカ 2 : 14) という時代の叫びが、斉唱されて聞こえてくるようでした。

天からの調べが私たちの心と溶け合った時、私たちは4人で歌いました。「むかしユダヤの野辺に、歌聞けり牧羊者……」(讚美歌199番) 歌い終わってから、私たちは外套にしっかり身を包み、星空の下に身を寄せ合い、ひとつとなって立ちました。そして肉体的、精神的、靈的、情緒的に一致しながら、親しく語り合いました。空に光り輝く明り以外何の照明もなく、私たちの静かなささやき声以外物音ひとつない中で、私たちには御父がとても身近に感じられました。御子もそうでした。私たちは祈りを捧げました。一人一人の声というよりは一致した声で、私たち4人の心からあふれ出る愛と感謝の気持ちを述べました。そしてその祈りは、その晩の全人類の祈りに加えられたのです。

私たちは感謝の祈りを捧げました。そして愛の心を伝えました。敬虔さによって豊かにされ、天からの触知できない力によって柔らげられたかすかな声で、ちょうどダ

ムの後ろに長い間せき止められていた水が、水門を開けて放たれた時のように、私たちの口からは真心からの感謝の祈りの言葉があふれ出しました。父よ、私たちはあなたが確かに生きておられることを知って感謝しています。ここでお生まれになった幼子が確かにあなたの御子であったことを知っています。あなたの教会のプログラムが真実であり、昇栄に導く実行可能なものであることを知って感謝しています。それから私たちはイエスを信じていること、イエスを愛していること、イエスに従うことを祈りに加えました。そしてイエスの目的とされることに対して、私たちの命を、私たちのすべてを捧げることを心新たに誓いました。

その時から何年かが経ちました。しかしいつもこの美しい季節になると、私たちは自らを主のみ業のために捧げようと決意を新たにします。そして私たちの主、救い主である神の御子イエス・キリストの生涯とみ教えに対して、あらゆる人々と共に喜びと愛と感謝の祈りを捧げるのです。

ホームティーチャーへの提言

1. 救い主の存在が日々の暮らしの中でどのように生きているかということについて、体験を述べる。あるいは聖典の中から、救い主の人類への愛と思いやりが美しく描写されている部分を話す。
2. 救い主の生涯と使命について、何かのきっかけがあって急によく理解できるようになったといったことがよくあるものである。そうした経験を家族に紹介してもらおう。
3. 救い主の生涯について毎日学ぶことにより主をよく知り、主が望んでおられるような生活が送れるように励ます。
4. このメッセージの中で、家族に読んでもらいたい聖句や言葉がないだろうか。このメッセージの中の聖句以外に参照できる聖句はないだろうか。
5. 前もって訪問先の家長と打ち合わせしておく、もっとよい話し合いができるのではないだろうか。

主を敬う

ジョン・ソーンダース・ランドバーグ

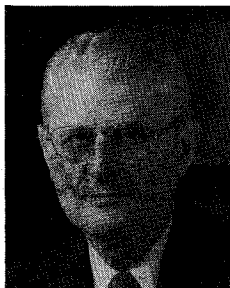
私たちはクリスマスを数日後に控えた家庭の夕べに、ひとりの独身の姉妹を特別ゲストとして招待しました。招待した理由について、私はみんなの前でこう彼女に話しました。「マリー、私たちはあなたの日頃の行ないを見て、あなたは救い主を愛する人だなんて思ったの。クリスマスの家庭の夕べには、本当は救い主御自身を招待したいんだけど、それは無理でしょう。だから救い主のようになろうと一生懸命頑張っている人をということであなたのことを選んだのよ。」

マリーはいろいろ問題を抱えてはいましたが、静かに人のために尽くす人でした。子供たち一人一人の感謝の言葉に、マリーの目からは涙があふれました。そして8歳の息子の番になった時、今度は息子の方が胸がつかまって何

も言えなくなってしまいました。この子は年の初めに読み方が遅れていたの、マリーに頼んで夏の間ずっと勉強を見てもらったのです。しかし彼女は、お金を全く受け取ろうとしませんでした。数カ月たった今、息子の成績は上がっています。

部屋にいた人たちは皆、息子が何を言いたいかがよくわかったことでしよう。その時、部屋はみたまにあふれ、あたかも救い主が降りて来られたかのようにでした。

私たちはこの経験から、クリスマスにはこれからもずっとキリストのような人を招待しようと思っています。その人を通して私たちも高められ、キリストと似た者になろうと努力するようになるからです。



祈り続けなさい

管理監督会第一副監督
H・パーク・ピーターソン

1980年3月2日、ブリガム・ヤング大学14ステーク部の
ファイヤサイドにおける話

人生における最も偉大な目的とチャレンジは、救い主について学ぶことです。主の戒めを守り、主に従って生きるなら、主を知ることができるようになります。主に対する知識は主を証することによって強められていきます。戒めも守らず、主を証することもせずに、人生の真の目的を達成することはできません。世には数多くの素晴らしい事柄をしながらも、救い主とその使命について証することのできない人が大勢います。

正しい生活をして行こうとする時、私たちは皆、試し、失望、落胆そして挫折を経験します。問題は次から次と絶えることがありませんが、それが当り前のようにも思えます。それはすべての人に言えることで、だれひとり問題を避けて通ることはできません。アリゾナ州で監督やステーク部長の

職にあった時のことです。正直言って私は教会幹部と呼ばれる人々には何も問題がなく、教会の管理運営以外には何も頭を悩ませる問題のない、非常に幸福な方々だと思っていました。しかしその後自分が教会幹部に召されて初めて、彼らも皆、自分自身の生活、家族のこと、健康上のことなど、数多くの問題を抱え、その解決のために最善の努力をしているのだということがわかりました。しかも私などにはとても耐えられないような試練なのです。

キンボール大管長の健康上の問題は、私たちが皆、よく知っていることです。何年か前に管理監督会の責任に召された時のことです。私たち新たに支持された幹部は、聖任の儀式を受けるために神殿内の一室に招かれましたが、それに先立って、当時十二使徒定員会会長の任にあったキンボール

大管長が祝福を受けることになっていました。というのは、大管長はその数日後に心臓手術を受ける予定だったのです。

椅子に座り、使徒たちから頭に手を按かれたその姿を見て、私は「この試練の道を歩んできた人が、どうして今になって心臓手術を受けなければならないのだろうか。」と思いました。もし主が望まれるなら、彼はたちどころに癒されるはずです。なぜ主がそうなされるのか、私には理解できませんでした。しかし、今となってはその疑問も解けました。皆さんもきっとそうでしょう。そうです、主はひとりの使徒を予言者となすべく備えておられたのです。主が必要としておられた予言者、大管長は、主のみ言葉に耳を傾け、みたまのさきやきを聞き、それを受け入れる人だったのです。

私たちが皆、耐えず試練を受けているのもそれと同じ理由によるのです。主にさらに近づき、すべてのことで主に頼むようになるには、こうした経験が必要なのです。それが、主が私たち一人一人に望んでおられることであり、ほかの何にも増して、主は私たちが主御自身を知るように願っておられるのです。

主が祈りを聞いて下さるということに確信が持てない、あるいは主の存在を身近に感ずることができない、罪の意識にとらわれて、自分はふさわしくないというような思いがあったとしたら、なかなか祈ることはできないかも知れません。どのような理由があるにせよ、そのような祈りは本来あるべき姿のものではありません。

ひとりになってひざまずき、自分にとって本当に大切なものを主に祈り求めてみた

が、思っていたような答えは得られなかったというような経験をしたことはありませんか。何か特別なことのために何日も祈り続けたが、何も期待していたことは起こらなかったというようなことはありませんか。私はそのような経験をしたことがあります。昔のことになりますが、祈りを終えて立ち上がってはみたものの、「こんなことをして一体何になるのだろうか。神様は聞いてくれるのだろうか」とか、「自分はふさわしくないのかも知れない」「自分には主の答えを理解する力がないのかも知れない」というような思いにとらわれて、失望したことが何度となくあります。

前のことですが、祈るということについて、そのような失望を感じた後で、私はすでに亡き人となっていた父とのことを考えていました。父が活着している時、私は何かにつけ父のところに行って相談するのが常でした。父も私の言うことを聞いてくれました。決して完全無欠な人ではありませんでしたが、私の話に耳を傾けてくれました。私が皆さんに理解していただきたいのは、神の霊の子供がひざまずいて祈る時、天父は必ずそれを聞いて下さるということなのです。私はこの世の中の諸々の事柄を知っているとるように、天父がその子供たちのすべての祈りに耳を傾けておられるということを知っています。私たちの祈りは天に届くのです。私たちがたとえ悪いことをしたとしても、神は私たちの祈りを聞いて下さるのです。

私は、神が答えを下さるということも信じています。霊の子供たちが語りかけているのに、神がそれを無視するなどというこ

とは信じられません。神と私たちとの交わりの中にある問題は、私たちすべてが神の答えをどのようにして聞くかを理解しているわけではない、あるいはその備えができていないということではないでしょうか。私たちが自らその備えをするなら、答えを受けることができるのです。

人はその一生の中で、時として神と自分との間に石の壁を築いてしまうことがあります。この壁は私たちが罪を悔い改めようとしなないことによってできるものです。その壁の中には形や大きさの違った石が幾つも入っているようです。例えば、だれかに対して不親切であったということからくる石もあるでしょう。指導者や教師に対する批判もさらに別の石を積み上げることとなります。卑しい思い、行ないはより大きな石をこの壁に加え、不正直、利己心なども同様の結果を招きます。

壁を造るのは私たち人間なのですが、そ

れでも神は、私たちが祈り求めるならば答えを送って下さいます。しかし、それが私たちの心の中まで届くことはありません。私たちが造った壁にぶつかり、はねかえされてしまうのです。そして私たちは、「神は私の祈りを聞いてはいない」、「神は答えを下さらない」などとつぶやくのです。この壁はちょっとやそっとのことでは動じない場合も時としてあり、それを打ち壊すことが一生をかけての大きなチャレンジとなります。つまり、私たちは自らこの内なる器を清めることによって、みたまとの調和を得ることができるのです。

例をあげてみたいと思います。だれかほかの人からいやなことをされ、怒りを覚え

“神の霊の子供がひざまずいて祈る時、天父は必ずそれを聞いて下さるということを私は知っています。”



たという経験はだれにでもあるのではないのでしょうか。そのことが頭を離れず、その人に近づくのもいやになります。このような心の状態を人は不寛容と言います。主は互いに赦し合おうとしないこのような人々に対して、非常に強い口調の言葉を発しておられます。何年も前のこと、私もこのことでひとつの経験をしたことがあります。ある人に対して、私は裏切られたという思いを持ち、その人がきらいになりました。その人には近寄りたくもありませんでした。彼が通りの向こうから来れば、道の反対側に寄りたりして、口を利こうともしませんでした。それは本来もっと早く解決しておくべきことだったのですが、いつまでも心をむしばむままにさせてしまっていました。私はその人に対して良い気持ちを持てるまで、そのことを祈り続けようと心に決めました。その夜、私はひざまずき、主に心を開いて祈りました。しかし、祈り終わってもその人に対する気持ちは何も変わってはいませんでした。翌朝も同じようにして祈りました。それでも彼への気持ちは変わりません。次の日も同じです。そして毎朝毎晩祈ったにもかかわらず、1週間たっても、ひと月たっても何も変わりませんでした。何度も祈り続けた末、私はただ祈るのではなく、全身全霊を傾けて神に嘆願することを始めました。そして、たとえ主に呼ばれても、自分で主のみ前に立ち、主も少なくともそのことについては、私の心を清いものと認めて下さると、何の疑いもなく確信できるようになりました。しかしそれは、祈りに祈りを重ねた末のことでした。こうして私の心の中によやく変化が訪れ、不

寛容の石が取り除かれたのです。

みたまのささやきを受け、祈りの答えを受けられるかどうかは、私たちが自分の人生をどう生きるにかかっています。誤解のないようにもう一度申し上げます。天父は私たちの祈りに答えを下さいます。ただ私たちに、天父のみ声を聞く備えができていないことがよくあるのです。答えがすぐに与えられる場合もあります。しかし長い時間を要することもあり、そこで落胆してしまうことがあるのです。

数年前、私はドイツへ行くようにとの指示を受けました。出発を前にして、私は流感を長びかせてしまい、行くべきものかどうか迷いました。しかし、すでに計画済みのことでもあり、多くの人々が私をあてにしていたこともあって、ドイツ行きを心に決めたのです。ニューヨークからフランクフルトへの空の旅を終えはしたものの、疲れがひどく、気分もすぐれませんでした。連れもなく、ドイツ語も話せない私は、とりえず空港ホテルに宿泊の手続きを取りました。私は自分の部屋に入る前に薬局へ行き、スプレー式ののどの薬を買いました。それは手の指位の長さのプラスチックの管をのどの奥に入れて薬をスプレーするという、押しボタン式の小さな容器の物でした。

私は部屋に入って、しばらく休もうとしました。そしてその薬を使おうとして、プラスチックの管を口にした時です。その管がはずれて、のどの奥に入ってしまったのです。痛みはありませんでした。7センチのプラスチック管がつかえているということはわかっていますが、自分では手の施しようがないのです。私は管を取り除くために、

咳をしたり、できる限りのことをしてみました。そして段々心配になってきました。命には別状はないだろうと思っていたので、別に死ということは考えませんでした。私には様々な国々で待っていている人々がありました。それから3週間の間にその人人を訪問することになっていたので。下手をすればプラスチック管を取り除く手術のために、結局は入院という事態になるということを考えた時、私はすぐに助けをもらわねばならないと思いました。私はベッドの傍らにひざまずき、自分が今頼るべきあてもなく、言葉もわからず、その上医者も知り合いも心当たりがなく、待っていている人々がいるということを主に話しました。そして、どうかその管を取り除いて下さるようと祈ったのです。祈り終えて立ち上がると、2秒とたたない内に管がのどから出て来ました。そうです。祈りにはすぐに答えが与えられるものもあるのです。

神はいつも私たちの祈りに答えて下さるのだろうかと考えることもあるかも知れません。我が家の4番目の娘が生まれたのは22年ほど前のことです。その出産の後で、妻は医者に、これ以上の出産は無理であると言われました。私たちはそれについて話し合いましたが、「私たちのために備えられた子供がまだいるような気がするの」というのが妻の言葉でした。それで私たちはもうひとりの子供を迎え入れることに決めたのは言うまでもありません。

それから1年たち、2年たちしましたが子供は授けられませんでした。そして、妻の口から、「とっても素晴らしいことがあるの、赤ちゃんができたのよ」という言葉

“すぐに答えが与えられる祈りもあれば、長い長い祈りの時を経て初めて、望みがかなえられる場合もあるのです。”



を聞いた時は、実に8年の祈りの日々がたっていました。そうです。すぐに答えが与えられる祈りもあれば、長い長い祈りの時を経て初めて望みがかなえられる場合もあるのです。

みたまのささやきにいかにかに耳を傾けるかを学び、それを受けるべく自らを備えていくと共に、私たちはそのささやきにどのように従うかをも学ばなければなりません。人生の最も大きなチャレンジのひとつは、神のみ言葉を受けられるように生活し、それに従う勇気を持つことにあるのです。

皆さんの状況が良いものか悪いものか、それはともかく、私は皆さんに次のことをしてみるようにお勧めします。

今晚、もしできる人は、自分ひとりなれる所へ行き、それができない人も、とにかく私の言うことをしてみてください。

まず、あなたがどなたに向けて祈りの言葉を口にするのかを考えて下さい。というのは、私たちはひざまずいて祈り始めることを急ぐあまりに、どなたに対して祈るのかを考えないことがあるからです。私はよく救い主の絵を思い描くようにします。天父がどのような姿の御方か、私にははっきりとはわかりませんが、そうすることによって、ひざまずく時に心を集中することができるのです。

そして、どなたに祈るかを考えながら、声に出して祈るのです。小さな声でささやくようにして祈りたいというのであれば、それもよいでしょう。自分の父親に話しかけるように、心に思っていることを話して下さい。主に対して偽りのない態度で臨んで下さい。そして自分が話したいと思って

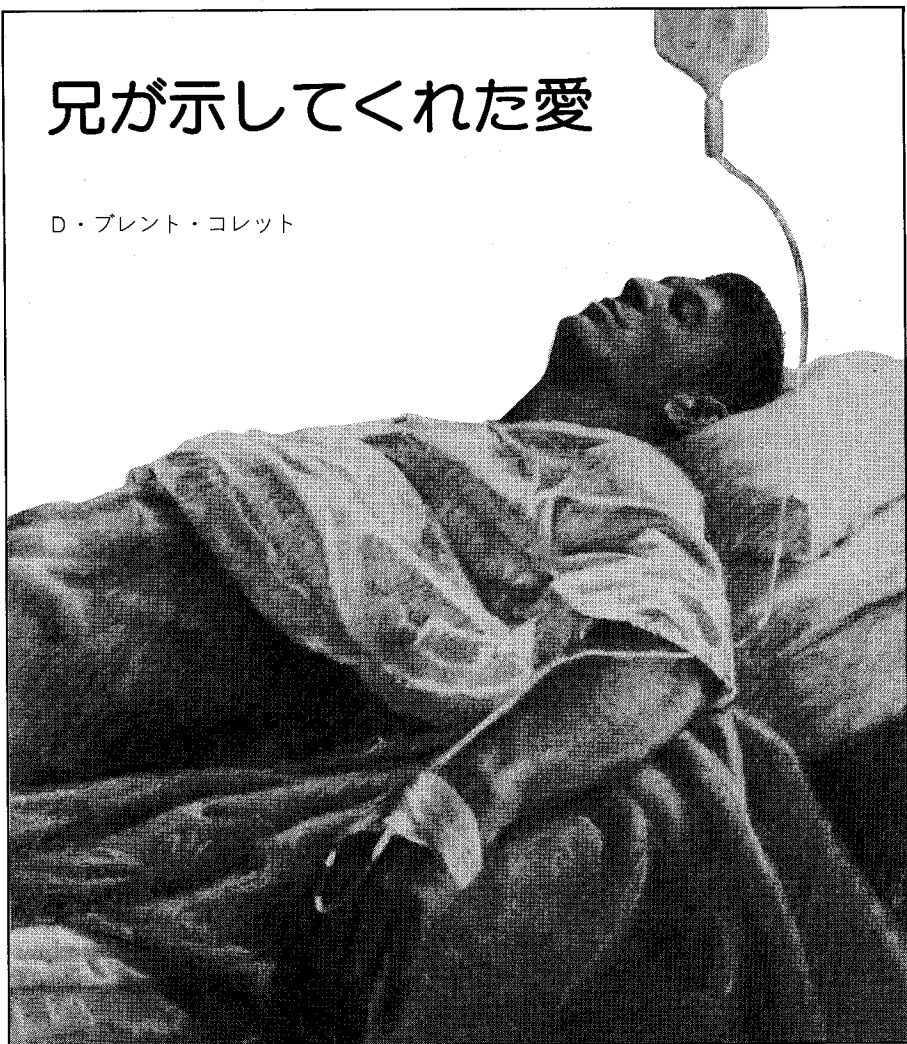
いることを話しかけるのです。主があなたにして下さったことに感謝して下さい。主に信頼し、あなたの心の中をすべて知っていただくのです。それから助けを請い、みたまを受けることができるのです。主を愛していることを述べて下さい。皆さんの中のどれほどの人々が声を出して祈っているか、またその祈りの中で主に対する愛を述べているか、私にはわかりませんが、それは素晴らしい経験となります。

祈った後は、主のみ声に耳を傾けて下さい。よくよく注意して聞くようにしないと、主の下さる答えを聞き逃すことになります。1分、あるいは2分、5分、15分と祈っているながら、1秒たりとも耳を傾けて聞こうとしない人が時々います。祈り終わっても、温かな良い思いが答えとして授けられるまで、椅子やベッドのところでそのまま、1分、2分、5分、15分とひざまずいていて下さい。そうすれば、主は自分の祈りを聞いて下さるということ、また主がそこにおられるということを知り、主の答えを得る方法をようやく見つけたのだということを知ることでしょう。みたまを感じる人には素晴らしい経験が訪れます。

主が天におられることを証します。主は私たちの祈りに耳を傾け、答えを下さいます。また私たちは主のみ声を聞く備えをしなければなりません。私たちは祈ることをせずに天父や救い主であられる御子を本当に知ることはできません。そして、祈ることをせずに主のみもとに帰ることもできないのです。

兄が示してくれた愛

D・プレント・コレット



私が人生で最も素晴らしい喜びを味わったのは、家族が霊的に一体となって主の助けを求め、激しい苦しみと闘っている私を支えてくれた時のことでした。私はそ

の時の経験を通して、家族と呼ばれる神聖な絆が主によって定められた理由を知ったのです。

私は高校3年生の時に腎臓病にかかりま

した。それから数年間、病状はしだいに悪化し、ついに危険な状態にまでなりました。最善の治療を受けたにもかかわらず、私の腎臓は両方ともだめになってしまったのです。

1968年1月、私はワシントン大学の医療センターに収容されました。医者は両親を呼んで、私の病状が重く、一晩もつかうかわからないと告げました。

父は私の親友とふたりで灌油の儀式を施してくれました。それから母が私の祝福文をバッグから取り出してその一部を読み上げ、証を述べてから私に手渡してくれました。母は静かにこう言いました。「あなたには大切な使命がありますよ。主はあなたを助けたいと願っておられるわ。だからブレント、あなたもがんばらなければね。」母は身をかかめると、おやすみのキスをしてくれました。

次に父が証を述べてから私の手を握り、胸を軽くついて言いました。「おやすみ、あすの朝また会おう。」

こうして私は病室にたったひとりで取り残されたのです。様々な考えが浮かび、昔の記憶がよみがえりました。私の手もとには祝福文が一通あるだけでした。

私は母の言葉について思いめぐらしながら、しだいに天父の方に心に向けていきました。今までに感じたことのない気持ちです。私は祈りました。最初は、やり残したことの多い自分の人生を振り返って心苦しくなりました。しかし、続けて祈っていると心が静まって、あたかも巨大な重荷が私

の肩から取り除かれたかのように感じました。平安を取りもどしたのです。私は温かい気持ちと慰めを受け、祈りが聞き届けられていることを知りました。そして、すべてはうまく行くという思いがわきあがってきたのです。

約2週間後に、私は退院できるだけの体力を回復し、それから7カ月間は何事もなく過ごしましたが、8カ月目に人工腎臓による最初の治療を受けることになりました。しかし、その間もすべては順調でした。なぜなら、私は真剣になって、イエス・キリストの福音がどのようなものであるのか見いだそうとしていたからです。

私はモルモン経を読むことから始めました。一度に数時間、あの素晴らしい聖典を読んで、モルモン経が真実であるという証を得、モルモン経自体の持つ愛を感じたのです。今や人生は新しい意味を持っていました。まるで暗闇の中に光がさし込んで、今まで見えなかった物がはっきりと目に入り、理解できたかのようにでした。私は啓発され、意識の高揚を覚え、導きを受け、霊的に生き返りました。今思えば、この時期は私の生涯で最も重要な時であったに違いありません。

当時は人工腎臓の開発がまだ十分に進んでいなかったため、費用や機械の不足などで、治療を受けられる人は限られていました。それを決める責任は、腎臓センターの職員にありました。私も人工腎臓センターに申し込み書を提出しましたが、条件の面で少々欠ける場所があったようです。私

には扶養家族がないし、一定の収入も資産もありません。しかし私には、私を励ましてくれる素晴らしい家族がありました。そして、医者もそのことを知っていました。家族が非常に親密で助け合っているので、私のまわりにはいつでも世話をしてくれる人がいたのです。このため私は新しく開発された家庭用の人工腎臓装置を試験的に使えることになりました。そして、いつの日か腎臓移植の機会も与えられるということでした。

それから3年間、私は人工腎臓装置の世話になりましたが、その間にたくさんのことを学びました。主に対する信仰は深まり、私の人生を導いて下さる主のみ手を実際に見ているかのようでした。家族ともさらに密接に交わり、人工腎臓を使っていたにもかかわらず、私は以前よりも日々の生活を愛するようになりました。これほど自由で、これほど幸福感を味わったことはありませんでした。しかし、私の切なる願いは、この装置から解放されることでした。

私の願いは、ほかの多くの問題がそうされたように、家族の問題として取り上げられました。家庭の夕べや家族の個人面接で、人工腎臓に代わる方法や、腎臓移植の是非について何度も話し合われました。

私にとって忘れることのできない一週間、それはしばらくの期間離れ離れになっていた家族が一堂に会した時のことでした。伝道、結婚、大学などで、各地に散っていた家族が、1970年のクリスマスに、まるで磁石で吸い寄せられるかのように、再び我が

家に集まったのです。

それから一週間、ほとんどの時間が私の健康について話し合うために使われました。腎臓移植についてできる限りの調査を行ない、家族全員が片方の腎臓を私に提供すると申し出てくれました。

ある日の午後のことです。私は兄弟たちとバスケットボールを楽しみました。私は途中でしばらく休んで、兄弟たちのプレーをながめていました。みんな素晴らしいスポーツマンでした。クレイグはオリンピックの水泳チームの候補選手になったこともあり、今では結婚して家庭を持っていました。バリーは州で最も優秀なフットボールプレーヤーのひとりで、今でも傑出したスキーヤーとして活躍していました。そしてケ빈は州の高校バスケットボールで最優秀選手のひとりに選ばれていました。

私はあふれ出そうになる涙をおさえながら、心の中でつぶやきました。「ありがとう、みんなの気持ちだけで十分だ。ぼくにはとてもそこまでしてもらうことはできないよ。」

クリスマスが終わると、バリーはブリガム・ヤング大学へ、クレイグとその家族はカリフォルニアにある家へ、それぞれ帰りました。私は伝道活動に没頭して忙しい毎日を過ごし、すべては平常にもどりました。

ある日の夜のことです。家族の祈りを捧げている時に、思いがけない不思議なことが起こりました。父の捧げた祈りが終わった瞬間、私たちはこれから行なうべきことをすべて理解したのです。私たちは目に涙

をためて、心に感じたことについて話し合いました。そうです、全員が同じ確認を受けました。腎臓移植の話を進めるべきだということでした。

振り返ってみると、この決定をしたことが最大の奇跡であったかもしれません。論理も個々の感情も問題ではなかったのです。私たちはみたまの導きを受けたのですから。

その夜、私はプロボに長距離電話をかけて腎臓移植についてバリーに話しました。こちらで受けた祈りの答えについて説明し、それについて祈るように頼みました。するとバリーは即座に移植の件を受け入れて、こう言いました。「ぼくは何度も祈ったよ。そしていつ電話がかかってくるかと待っていたんだ。」私は6月になったら来て欲しいと言いましたが、バリーは翌日、登録していたクラスを全部落としてすぐに飛んで来てくれました。

家に帰ってきたバリーは、さっそく医師の診察を受けました。ところがその診察で、バリーの体はメキシコで伝道中にオウム熱に対する免疫ができていたことがわかりました。この免疫があると、移植後に必要な薬物治療で特異な反応が起こる恐れがあるのです。バリーにとってはとても残念なことですが、彼の腎臓は移植できないとの診断が下されました。

それから2週間後に、私たちはもう一度特別な家庭の夕べを開きました。そして、腎臓移植を進めるべきだという気持ちを再び感じました。私は電話をかけて、今度は兄のクレイグと話をしました。クレイグも

喜んで承諾してくれました。

1週間もたないうちに、クレイグは妻のペニーと1歳になる息子のジョンソンを連れて、カリフォルニアから飛行機でかけつけてくれました。その日の午後には私は入院し、クレイグは翌日病院に入りました。

私たちの名前は、家族の友人たちの手によって、ロンドンからロサンゼルスに至る6つの神殿で祈りの名簿に加えられました。

手術の前夜、私の病室で家庭の夕べが開けられました。私はその場で、移植に伴う危険や犠牲を兄に求めることはできないように思うと、家族に説明しようと思いました。しかし、父は静かに私の方を見ると、私の肩に手を置いてやさしくこう言いました。

「家族みんなが感じているように、これは主が望んでおられることだ。クレイグはこのことを誇りに思っているんだよ。覚えておくんだ、ブレント、だれも欠けたりはしない、おまえが公園の芝生の上を満面に笑みを浮かべて走り回るのを、家族みんなが見ることになるんだからね。」

手術は翌朝の6時に始まりました。手術の前に看護婦が鎮静剤を打ってくれました。その日の夜遅く、私が目を覚ますと、すぐそばに両親の顔がありました。私は病室にもどされていました。すべてはうまくいったのです。

少しの時間ですが家族と会うことができました。しかし、クレイグが見あたりません。「クレイグはどうしたの？、どこにいるの？」すると母がやさしく私の肩に手を置いて言いました。「ブレント、クレイグは

元気よ、あなたの新しい腎臓もね。」母の言葉を聞くと、私は安心して眠りにつきました。「ありがとう、天のお父さま……ありがとう、クレイグ……ありがとう、家族のみんな……。」

それから2、3日たちましたが、家族の顔から不安の色が消えないのを見て、何かよくないことが起こっていると感じました。クレイグの容態が思わしくないのです。3日目になると、クレイグはすでに死んでいて、だれもそれを言い出せずにいるのではないかと思うようになりました。実際には、死んでいなかったのですが、クレイグは重態でした。手術からの快復が難しくなっていたのです。

3日目の午後、父と弟がクレイグを連れて来てくれました。クレイグは熟したバナナのような顔色をしていました。そして半ばほほえみを浮かべながら、「やあ、調子はどうだい」と言いました。兄の苦痛を目にし、兄の払ってくれた犠牲について考えた時、私は本当の愛とは何か、家族のもつ意味とは何か、はっきりと理解したのです。

2日後に、私の体が移植した腎臓に対して拒絶反応を示しているという報告がありました。手術は失敗したようです。徹底的な治療が行なわれましたが、ほとんど成果はあがりません。結局、最も力強い助けは祈ることでした。今でもその時の光景が私の心に深く刻み込まれています。毎晩家族が私のベッドのまわりにひざまずいて、ひとりずつ天父に祈りを捧げました。ある夜、私の快復を願って弟が泣きながら祈りまし

た。あたりは静けさに包まれました。だれも何も言いません。安心して眠るようという気持ちをみんなが感じていました。その夜は安らかな眠りにつきました。家族一人一人がキリストの純粹な愛を体験したのです。

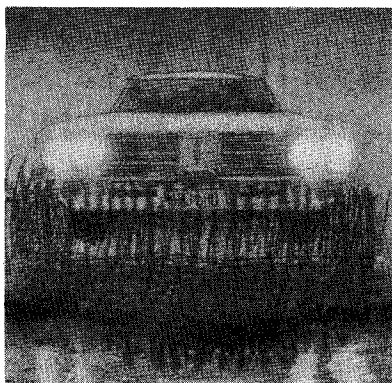
私は腎臓に対する拒絶反応をとうとう克服しました。クレイグも急速に快復していききました。現在、私の担当医は、私が腎臓移植の素晴らしい成功例のひとりに数えられると言います。私には美しい妻とふたりの息子、それにひとりの娘がいます。クレイグも今では3人の子供の父親で、普通の人と変わらない生活を送っています。周囲の人々は、彼が数年前にシアトルへ旅行した理由さえ知らないのです。

この世で味わう最大の喜びは、家族が霊的に一体となって主の助けと慰めを求める時にもたらされます。私のために示してくれた愛に、私は畏敬の念を抱いています。家族について考える時、福音で結ばれた私たち家族の真の頭であられる主のことが心に浮かびます。主の愛、主の献身、そして私たちのために進んで捧げて下さった主の犠牲について考えます。私はイエス・キリストの贖罪に対して特別な証と感謝の気持ちをもてるようになったと思います。それは、私の兄が示してくれた愛と犠牲が意味するものを、私は知っているからなのです。



真夜中の警告

イザベル・ハンソン



8 月の暑い夜のことでした。夫のリンと、6人の子供たちは、車の中でぐっすりと眠り込んでいました。ワイオミングのロックスプリングスを過ぎた頃から、夫が休息をとれるように、私が代わってハンドルを握っていました。夜更けには夫の両親の家に着きたかったので、走り続けなければならなかったのです。私たちは、ミズーリ州セントルイスから、アイダホに行く途中でした。リンはセントルイスで歯科医になるための勉強をしていました。

ハイウェイ30号線を出て、ベアレイクへ向かって、北へ針路を取り始めて間もなく、迂廻のサインが目に入り、私は右の方の舗装されていない道へ入って行きました。しばらく走れば、またもとの道へ戻れるものと私は思っていましたが、だんだんひどいデコボコ道になってきました。と、突然、静寂の中から「生まれ！」というはっきりとした声がしました。

ゆっくり走っていたので、ブレーキを踏むか踏まないうちに、車は止まりました。7つの頭が次々ともち上がり、「ここ、どこ?」「どうしたの。」「どうして、こんな所で止まるの」と尋ねました。

「止まりなさいという声が聞こえたのよ。何かあったに違いないわ。」私はそう言うことしかできませんでした。夫は、懐中電灯を持って、外へ出て行きました。見ると、前輪が運河の縁に乗り上げていたのです。

私は、歯の根が合いませんでした。年上の息子が誘導し、リンがハンドルを握って、車をバックさせました。それから、もと来た道をひき返し、ハイウェイへ戻る小さなサインを見つけることができました。サインがあまり小さかったので、暗闇の中で、私はそれを見落としていたのです。私たちは皆、感謝に満ちあふれて、頭を垂れたのでした。

バーバラ・B・スミス
奉仕の召し，喜びの時

ジョアン・ジョリー



バーバラ・ブラッドショウ・スミスは、
優しく教会の姉妹たちの間を巡り歩き、彼女を150万人のメンバーを擁する扶助協会の会長と仰ぐ世界中の姉妹たちと、温かい握手や抱擁を交わしてきました。教会中の女性たちが、彼女の静かな威厳に引きつけられたとしても、驚くに当りません。

だれもが、個人的にスミス姉妹に会えるわけではありません。しかし、彼女は、できる限りの人々を、夕食に招待しています。

「バーバラは、教会の姉妹たちに、深い思いやりと関心を持っています」と、夫君はプライドをもって語ります。ダグラス・H・スミス氏は、まっ先に彼女を理解する人であり、彼女の強さや能力の源になっているのです。彼は言います。「以前、私共の子供のひとりが言ったことと同じことなんです。皆様方がいつであれバーバラに奉仕の召しを下される時、皆様は家族全体を召して下さるのです。なぜなら、私たちは皆、同じ業に召されたのですから。——私たちはバーバラが何をするにしても、皆、彼女に協力します。子供も、孫も、隣人も、友達も、私たちに協力して下さる方々は皆、家族全体が彼女と共に働き、彼女を助け、支持します。それは、彼女がいつも私たちの召しに協力してくれるので、私たちも彼女の召しの一端を担うのが楽しいからなのです。私共は、とても強く結ばれた家族です。」

スミス姉妹は、扶助協会を家族と同じ働きをするものであると考えています。つまり扶助協会は、主の祝福を感謝し、ほほ笑みを学び、他の人のために時間をとることを学び、私たちが肉体を持つほんの短い時

間の中で喜びを学ぶ場であると感じていらっしゃると思います。今は奉仕と喜びの時、そして、私たちの唯中に主のみたまが宿らなければならない時です。私たちが、主をお迎える状態であれば、実際そうなるでしょう。

彼女はこう述懐しています。「主は常に私を祝福して下さいます。私は、否定的な姿勢をとったことはありません。人生は、素晴らしい、楽しい経験の連続です。もちろん問題は起こります。でも私は、生涯を通じて、主が私を愛し、助けて下さると感じてきました。」

お嬢さんのキャサリン・フォークナーは、次のように言っています。「母には、色々なプロジェクトがありましたが、問題は何もありませんでした。母はいつも、私たちも一緒になって問題に取り組むようにし向きました。」

中央扶助協会書記兼会計係のマイヨラ・R・ミルテンバーガー姉妹は、こう言います。「彼女は、とても近づきやすい人です。彼女のそばに行くと、温かく迎えてくれるという気持ちがするのです。」扶助協会第一副会長のマリアン・R・ボイヤー姉妹は、実にこうつけ加えています。「隣人への関心ゆえに、大切な集會に遅れて来る彼女を、度目しました。」第二副会長のシャーリー・W・トーマス姉妹も言います。「彼女はいつも感謝の気持ちを心に持っています。彼女を見る人は、彼女の感謝の念と強さに気づくはずです。」

彼女のそうした特質は家族が源なのです。「母は、忙し過ぎて家族を顧みないなどという事は、決してありません。」今は結

キンボール大管長が私共の家に来られて、こう言われました。「バーバラ、あなたをこの教会の扶助協会の会長に召すためにやって来ました。」

婚して2児の母になっている、スミス家の7人きょうだいの末子シェリリン・アルバは言います。「それは、私たちの成長過程でも、今でも変わりません。私たちが母の助けが必要な時には、母はいつもそばにいます。母の意見や、助言や、忠告が聴きたいと思う時、母がいてくれないなんて、想像することもできません。」

「母は、よい所を見る賜に、本当に恵まれた人です。」お嬢さんのリリアン・アルドレッジは言います。「私が小さかった頃、母はどこへでも私を連れて行きました。そして、いつも私に話しかけてくれましたので、私は自分が必要とされていて、大切な存在なのだと感じるようになりました。」彼女の思いやりは、お孫さんにまで及んでいます。

リリアンは言います。「先日私の子供たちに（一番上は14歳ですが）、スミスのおばあちゃんはどうな人って尋ねましたら、時間をとって、よく家に来てくれる人だっていう返事でしたわ。」

中央扶助協会々長にとって、時間は貴重です。家族が共にいられるように、一生懸命働き、神殿に行き、孫たちの誕生パーティ

ィーをし、子供たちの家で食事をします。スミス氏は言います。「うちでは、何でも皆一緒にするんです。だれかが問題をかかえていれば、皆で考えます。だれかが功をおさめれば、皆で喜びます。だれかが人々に仕える召しに召されれば、できる限り共に召しを果たすのです。」

スミス姉妹の夫君は、40年の長きにわたって、ベネフィシャル生命保険会社の社長として働いて来られ、今では地区代表として、教会の召しを受けておられます。長年にわたる相互理解、夫君の助けと支援は、だれもが認めるところです。おふたりは、結婚生活全般を通じて、教会と社会の重い責任を共に担い、どちらかがどちらかの責任を担うことを厭うようなことは、決してありませんでした。

スミス姉妹の扶助協会の召しに対する夫君の姿勢は、信任の一語に尽きます。「キンボール大管長が私共の家に来られて、こう言われました。「バーバラ、あなたをこの教会の扶助協会の会長に召すためにやって来ました。」そして、大管長は私の方を向かれて、『ダグラス、彼女のこの召しを支持して下さいますか。この時、私は大管長が私に特別な召しを下されたのだと感じました。それは、人々に仕える私の召しです。私はキンボール大管長にこう申し上げました。バーバラはこの35年間、私が教会で働く間ずっと支持してくれました。ですから、彼女を支持することは私にとって大きな喜びです。そして、今までそう努力してきました。』

教会の姉妹の大多数は、スミス姉妹の説教に耳を傾けたり、女性たちのファイアサイドを指揮したり、報道関係者に意見を述

べたりする友愛に満ちた、しかしながら確固とした立居振舞を目にしたたりしたことでしょう。彼女は確かに尊敬に値する女性です。しかし、彼女の心の奥底にある確信を、小さな集まりで話す時、彼女の温かさがよく感じられます。また、彼女があなたの手をとって、「お会いできてうれしいわ」と言う時、彼女が本当にそう思っているということがわかるでしょう。皆様はきっと、すぐにバーバラ・スミスが好きになることでしょう。お嬢さんのリリアンの言うことは本当です。「母は私たちに、部屋を出る時は、入った時よりもきれいにしておなさいと教えました。母はどんな人と会う時でもそのことを実践しています。」

スミス姉妹は、公的にも私的にも扶助協会に対して深い確信を抱いており、扶助協会と女性たち全般に対して、関心を持っておられます。世界各地に住む末日聖徒の姉妹たちに対する彼女の考えを、御紹介しましょう。

ステーキ部扶助協会管理会の組織

私たちはステーキ部管理会を組織し、2名の副会長が、プログラムの方向づけに関する情報に関して責任を持ち、会長が、会員の指導に関する情報に関して責任を持つこととしました。こうすることにより、従来よりも扶助協会の会員が強められることと思います。焦点が広げられ、力が増し、幅広い扶助協会の活動ができることでしょう。管理会員は、従来会長が扱っていた多くの分野にわたる事柄を管理するようになりました。管理会員は、活発化／伝道、カリキュラム／現職コース、ホームメーキ

ング／託児、指導者養成、音楽／レクリエーション、独身成人／若い女性からの移行、福祉、そして訪問教師／慈善奉仕のプログラムに直接携わることになります。一般に、ワード部でも同様に行ないます。私たちは、このことに関し、大いに喜びを感じています。多くの人々が参加すればするほど、大きな報いが得られるのです。

扶助協会の潜在力

扶助協会がどんなに優れた組織であるか、本当のところはだれも知らないと思います。この組織が主から与えられたひとつの理由は、今日私たちが活動するに必要な知識や英知を得ることです。それは学業を通して得られる知識というようなものではなく、私たちを導いて下さるみたまにより与えられる知識です。私たちは、まだほんの入口に立っているに過ぎません。過去の信仰強い女性たちのおかげで、私たちに素晴らしい基盤があります。今日私たちに課せられている大きな責任は、知識と情報を得、天の祝福を享受するようになることです。

福音の原則に従って生活する

教会の女性にとって、福音の原則を学びそれを各々の持場で応用すること以上に大切なことはない、声を大にして訴えたいと思います。これ以上大切なことを、私は知りません。主は私たちに内容の異なった聖典をお与えにはなりません。独身者にも既婚者にも、同じ聖典を与えたもうたのです。しかし、独身の姉妹たちは、よくこう言います。「それはそうですが、他の人たちよりももっと私たちに合ったレッ

スンを、なぜして下さらないんですか。」しかし、一人一人のためのレッスンは準備できないのです。私たちは、だれにでも応用できるレッスンを準備しなければなりません。原則は不変です。悲しいことに、私たちが自分の理解を狭めてしまっているのです。しかし、「なぜ、私向けに原則を教えては下さらないのですか」と言うかわりに、「私はこの原則を、どのように応用できるだろうか」と言ってみてください。主は、すべての事柄にわたって私たちが、主の原則を応用して行く術を身につけるよう、望んでおられます。

扶助協会に入る若い女性

彼女たちには、扶助協会が主からの素晴らしい贈り物であることを知って欲しいと思います。中には、かつて全く扶助協会を知る機会のなかった人もいます。そのような人々は年上の姉妹たちの強さを発見し、彼女たちがこの組織に大きな貢献をしていることを知るでしょう。扶助協会は彼女たちのものであり、彼女たちのこれからの生涯のためのものなのです。それは一時的に与えられる責任ではなく、生涯を通じて参加して行く組織であり、主が彼女たちを祝福し、強めるために準備されたものなのです。

もし、そのような若い女性たちに対して、どうすればよいかとお尋ねになるならば、彼女たちに、すぐ責任を与えなさいと、お答えしたいと思います。彼女たちに、ポジションを与えて下さい。彼女たちは学ぶ必要がありますし、多大の貢献ができるのです。私は実際、若い女性たちが会長会、教

もし扶助協会が姉妹たちを本当に参加させるならば、彼女たちは各々の家族を強め、終わりの日まで歩いて行くに必要な堅実さを身につけて行くことでしよう。

師、または委員会の委員として働いているのを目にしています。彼女たちは、必ずや、教会の素晴らしい姉妹たちの中でも献身的な会員になることでしよう。

扶助協会と伝道活動

もしも扶助協会が求道者や改宗者たちを活動に参加させなかったならば、彼女たちは次々に落ちて行っただろうと、私は何人もの伝道部長や神権指導者、扶助協会の指導者から聞かされてきました。しかし、もし扶助協会が姉妹たちを本当に参加させるならば、彼女たちは各々の家族を強め、終わりの日まで歩いて行くに必要な堅実さを身につけて行くことでしよう。そして、彼女たちが扶助協会に集うようになるなら、落ちる人はほとんどいなくなるでしょう。

力の源である家庭

家庭で起こることは、力の源になります。家庭は神権が機能する場であり、よい生活の模範が示される場でもあります。家庭から慈善奉仕が始まり、家族は福音のすべての原則を学び、それに従って生活します。家庭は私たちが進歩成長し、悪を退け、永

遠の祝福を勝ち得る力を身につける助けをしてくれます。

今日の世界の悪の力

思うに、家庭を破壊しようとする力は今日最も強くなっており、離婚、子供の虐待、不道徳、神経衰弱というような型をとって現われ、家庭を破壊し、自尊心や自己の価値に対する意識をくじいています。私たちは家庭を強め、このようなことを起こさせないような力を持たなければなりません。家庭が崩壊すると、夫婦が共に愛をもって働くという模範がなくなり、力を得る源が打ち砕かれてしまいます。

神権者と扶助協会が共に働く

この神よりの組織を持つ教会にあって、自分以外の人々が持っている強さ、特別な責任、重要な目的について理解することは、だれにとっても必要です。私たちは皆、すべての人々に与えられるはずの最も素晴らしい祝福をもたらすために、互いに努力しなければなりません。たとえば、神権組織が何かのプログラムを推し進める時、扶助協会はそれを支援する必要があります。また、私たちは神権指導者のために祈り、何でも助けられることがあれば、それができるだけの備えをしておかなければなりません。たとえば、慈善奉仕がそれです。女性には、心からの慈善奉仕をするという、素晴らしい機会があります。神権者たちが、そのような業をする時には、手助けができます。そのようなことが、もっとたくさん起こるようにと願っています。

姉妹たちの守り手

互いに仕え合う最も素晴らしい方法は、「互いに欠点を捜すことを止め」（教義と聖約 88：124）互いに良い所を捜すことであります。そうすれば、互いの進歩を助けることができます。今日の社会は、自己主張と欠点暴露の社会です。そのような社会の風潮は、変えていきたいと思います。私たちは互いに、「あなたは特別な人です」と言おうではありませんか。

思いやり、キリストの純粋な愛

思いやりは、単なる行為でも言葉でもありません。その裏には、人を動機づける何かがあります。キリストは、よい行ないの大切さを私たちが理解できるように、助けて下さいます。なぜ人の必要に気づき、愛をもって助けなければならないかを理解する時、私たちは、より高い状態へ引き上げられるのです。思いやりのある人になろうとすることは、救い主のようになろうとすることです。毎日、他の人々を祝福するために働く時、思いやりは、自然に湧いて来るものだと思います。

教会の姉妹たちのために祈る

毎日、姉妹たちのために祈ることができなければ、彼女たちに対して、大きな愛を感じることはできません。私は、主が姉妹たちを祝福したもうように祈っています。また、扶助協会が彼女たちを助けるためにあり、彼女たちも他の姉妹たちを助けるために役立てることを、彼女たちが知ってくれるように祈っています。そして、彼女たちが互いに大きな愛を持つことができるよう、祈っているのです。

心はずむ扶助協会

パトリシア・W・ヒグビー

あの憂うつな春の朝、もし私の小さな娘からあの核心をついた言葉を聞かなかったら、私は恐らく扶助協会を通して得られる多くの助けに気づかないまま、扶助協会に出席し続けていたことでしょう。

あの朝、私はせわしく皿を洗いながら台所の窓から外の黒雲と吹きつける雪を見ていました。大概、そのような天気の時憂うつになるのですが、大好きな讃美歌「冬の日も終わりに近づき」(*The Wintry Day, Decending to Its Close* 英文讃美歌292番)が心に浮かんできて、私は思わずハミングを始めました。

すると、朝食をしていた小さな娘がテーブルの方からこう言ったのです。「きょうは扶助協会があるのね！」

「どうしてわかったの。ママがレッスンの本を読んでいるところを見てたの」と私は尋ねました。

「ううん、ちがうわ。」娘はくすくす笑うとこう言いました。

「だって、ママ今歌ってたでしょ。」

「何を言ってるのよ。ママが歌っているのと扶助協会がある日とどういう関係があ

るの」と私は問い返しました。

私の反応を見ながら、娘はゆっくり答えました。「だってママ、朝はいつもきげんが悪いはずよ。」

確かに、私は朝が苦手です。でも内心では、娘が少々オーバーな言い方をしたのだと思いたい気持ちです。いずれにしても、娘はそれなりに、扶助協会に行くことが私にとって喜びであることに気づいたのです。私はそれから、自分がなぜそれほど扶助協会に対して熱心なのかを考えてみました。

姉妹愛と奉仕

扶助協会で、私はいろいろな人と友達になることができます。生活環境や才能、趣味、方針、考えなどが私とはずいぶん異なった多くの人々と親しくなり、あらゆる年齢層の姉妹たちに対する認識を深めることができます。そのような姉妹たちに心を配る時に、私は彼らやその家族のためになんとか役立ちたいと思うのです。

扶助協会はその組織が存在する目的のひとつとして、人類に対する奉仕を挙げています。そのようなことから私自身の奉仕

に対する考え方は明らかに改善されました。

例を挙げてみましょう。数年前のことで、私たちのワード部のある兄弟が、奥さんと子供たちがインフルエンザにかかっていると仰いました。私は同情していつも口にするように、何かお助けできることはありませんかと尋ねました。彼の返事は私を驚かせました。「そうですね、あしたの夕食でもお願いできたらうれしいのですが。」

翌日私は、御主人が元気なのだから、いくらでも自分の家族の食事ぐらい用意できるはずなのに、私が貴重な時間をさかなければならないなんて、そう考えて一日中不平を言っていました。あの時の気持ちと、最近、手術のあとで養生している姉妹の家族のために夕食を準備してあげた時に味わった喜びとは、なんと対照的だったことでしょうか。

このふたつの経験の間で、私の態度を変えさせたものは何だったのでしょうか。扶助協会の慈善奉仕に関するレッスンもそのひとつですが、それ以上に影響を与えたものは、ワード部内における素晴らしい奉仕の業の模範です。あまりにも多くの姉妹たちが奉仕を望んでいるために、リストに名前を連ねて奉仕する番を待たねばならないような場合もあるほどです。

扶助協会は私に、才能をみがき、新しい才能を見だし、ほとんど知識のない事柄さえも成し遂げる機会を与えてくれます。私は最近だけれが、「自らの手に成るもので着飾りなさい」(*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p. 214)

というブリガム・ヤングの言葉を引用するのを聞いて、心地良さを覚えました。若い頃には裁縫がきらいで、それが自分の才能などと一度も考えてみたことのない私ですが、今では自分や子供たちの服を作ることに喜びを見いだしています。これらの私にとって新しい技術は、ほとんどが直接扶助協会のレッスンで学んだことです。

私は歌が下手です。実際、私の十代の頃のある友人は、教会で一緒に座っている時に、間違っ歌っているのが彼女ではなく私であることが皆にわかるようにと、よく歌うのをやめてしまうほどでした。しかしあるワード部で、私はステーキ部準備会で発表する小さなコーラス隊のメンバーとして非常に必要とされたことがありました。その日歌いながら、私は初めて主への讚美を歌うということがどういうことかを悟ったのです。まだ上手に歌うことはできませんが、扶助協会での練習を通して、そのような機会がなかったなら決して味わうことなかった幸福感を味わっています。

子供たちとの色々な活動がうまくいっているのも、他の姉妹たちから教えて頂いたアイディアのおかげです。ある姉妹は、家族が意気消沈しているような時や、家族の作物を育てるために一生懸命に畑仕事をしなければならぬ時に、福音の話をして子供たちを元気づけ、教えたと話してくれました。彼女は夜のうちにモルモン経や聖書、教会歴史の物語を読んでおいて、翌日詳しく子供たちに話してあげたのです。彼女のそうした努力によって、子供たちは福音に対す

る愛を強め、楽しく仕事をするようになりました。現在我が家では、一緒に仕事をする時や髪の手入れをする時、また旅行の時などに、福音の話をするようにしています。

靈性を強める

私に姉妹愛や女性らしさを経験させ、才能を伸ばす機会や学ぶ場を与えてくれるグループは、多分他にもあるでしょう。しかし私にとって、靈的再生という最も本質的な一面で影響を与えてくれる場合は、扶助協会をおいて他にはありません。

初めて家族から遠く離れて大学に通うようになった時のことです。私は日曜日の朝に扶助協会があることを知りました。その頃私は扶助協会というものは年輩者のためにあるものと思っていたので、出席してもあまり気乗りがしませんでした。ところが、その年も終わろうとする頃、週末を家で過ごしていた私はとても物足りなく感じました。それは、日曜日に扶助協会に出席することによって得られる靈的高揚がないからでした。やがて私は主にもっと近づくために断食して祈る習慣を身につけました。レッスンの準備をする時には特にそうするようになりました。

今でも私は、主に波長が合っていないと感じる時には当時を思い出し、自分が努力しさえすれば再び主に近くあることができるということを知って慰められます。扶助協会は靈感によって組織され、計画され、運営されています。毎週出席することによって、私は神の律法にそった生活をするよ

うになり、神の助けを受けられるようになります。

数年前のある友人との会話が、私に扶助協会に出席する決意をさせてくれました。私がちょうど短い教師生活を「引退」して家庭に入っていた時、友人がこう言ったのです。

「仕事に戻らなければ、これまで受けた教育がすべてむだになるんじゃないかしら？」

私の返答は、彼女の納得のいくものではありませんでした。「あなたのことは私がよく知っているわ」と彼女は言い張りました。

「あなたは料理も裁縫も好きじゃないわ。それに十代の頃に私たちがよくやっていたベビーシッターだって一度もやらなかったし……。あなたは立派な学生よ。しかも学業を達成したいと思っているわ。あなたには並の生活は向いてないのよ。家にも2,3年もたたないうちにあきてしまうわ。」

「でも、扶助協会があるわ。」私は少々ひとりよがりな気持ちで答えました。

「一週間に一度の集会で、あなたの必要なものをすべて提供してくれるとは思えないわ」と彼女は反発しました。

それからしばらくして、私はあの時の話し合いはふたりとも正しかったということに気づきました。家にいることに満足するということは、私にとって予想以上に大変なことでした。しかし私は、姉妹愛や奉仕の気持ちを強め、女性らしさを強調し、才能を伸ばし、学習意欲をかき立たせ、靈性を高めてくれるこの組織に加わることによって、幸福感を味わっています。実際、私が歌を口ずさんでいるほどですから。



アロン

ビクター・L・ラドロー

遠い昔、アロンとその弟モーセは神権指導者として優れた模範を世に示しましたが、この事実を知る若いアロン神権者は少ないようです。モーセはイスラエルの民を束縛から解き放ち、「モーセの神権時代」を確立しました。確かに彼の予言者としての業績は偉大であり、その前には兄アロンの祭司としての働きも色あせて見えます。しかしふたつの神権の内的一方にその名が冠されているのは、アロンが模範を通して立派に神に仕えたということの証左なのです。

私は25年前に初めてアロン神権を受けました。それ以来、アロンが鮮やかに実践した神権指導者の根本原則を学び、かつ行動に移すよう努力してきました。私の心には10の原則が深く刻み込まれています。次にそれを挙げてみましょう。

第1に神を受け入れること。

アロンは少年時代に、モーセが奇しくも死から救われ、ミデヤンの地に逃れるまで殉爛たる王室で育て上げられるのを目にしました。その間アロンは奴隷の境遇にとどまっていたのですから、彼が神やヘブル人の宗教に背いたとしても決しておかしいことではなかったでしょう。それにもかかわらず、アロンはさらに主に近づいて行ったに

違いありません。どのようにして証を得たかを伝える記録は残されていませんが、80歳を過ぎた頃、主から「荒野に行ってモーセに会いなさい」（出エジプト4：27）と告げられました。その後アロンはモーセと共に様々な試練に遭いましたが、そのたびごとに神に対する信仰によって自らを勇気づけ、力づけていったのです。

皮肉なことに最初の試練は、ほかならぬ彼の民によって引き起こされました。モーセは自分がイスラエルの民の解放者であることを人々に信じさせるために、主から奇跡的なしるしを与えられていました。（出エジプト4：1—9参照）そしてこれらのしるしとアロンの証によって、ふたりはイスラエルの民を確信させ、民の代表としてパロの前に姿を現わすこととなったのです。（出エジプト4：29—31参照）しかし、パロが立腹して人々の労苦を増したので、イスラエルの民はモーセとアロンに従わなくなりしました。モーセは祈りの中で心の痛手と疑念を吐露しましたが（出エジプト5：20—23参照）、モーセやアロンの信仰がいささかなりとも揺らいだという形跡は見られません。

私にも信仰を試された経験があります。インディアナ州ブルーミントンの高校に3年間通学した時のことですが、そこでは非教会員の友達が常に私の信仰をくじくような言動で接してきたのです。その時、信仰を守るために私にできることは、モーセとアロンが行なったこと、すなわち心をより一層主に向けることだけでした。私は神が存在しないことを証明できないのだから、神は必ず存在するに違いないと考えました。また神は私にみこころを示すことができになり、また実際に示して下さるであろうと思いました。このような確信を持ち、両親の証が何か真実なものに立脚しているに

違いないと信じた私は、熱烈な祈りをささげました。そして苦心^{きんたん}惨憺した末に、神が確かに生きてましますという証を得ることができたのです。

第2に人格を築き上げていくこと。

アロンの人生を見る時に深く印象に残ることは、なぜ彼がそうも完全に自分の弟を予言者として受け入れ得たかと言うことです。モーセは一度もヘブルの奴隷として生活したことはありませんでした。しかも40年間エジプト国外で生活していたのです。年齢と経験を考えるなら、アロンは彼自身の方がヘブルの民をエジプトの地から導き出すにふさわしい人物であると考えたことでもできたでしょう。しかし彼はモーセを初めから主の予言者として受け入れたのでした。そうは言っても、アロンと姉ミリアムは神とモーセの関係を嫉妬したかどで主の叱責を受けたこともあります。（民数12章参照）これが器の小さい人物ならば苦々しさと嫉妬のあまり予言者に逆らったかも知れません。しかしアロンは悔い改めたのでした。

このような意味合いにおいて、彼は何度となく誘惑に遭いました。思うに、アロンはヤコブの息子であるヨセフの予言、すなわちモーセと呼ばれるひとりの聖見者が王の娘によって育て上げられるであろう（ジョセフ・スミス訳創世50：29参照）という予言を知っていたのかもしれませんが。アロンについては予言的な約束や奥深い祝福師の祝福は何も残されていないのです。彼が嫉妬し無関心に陥って自らの成長を妨げたとしても不思議ではなかったでしょう。にもかかわらずアロンは常に自分の生活と人格を高め、ついには偉大な僕として主のみ旨を代弁するまでになったのでした。

私自身について話をするならば、もっと

低いレベルにおいてですが、同じように複雑な心境になった覚えがあります。それはプロボ第9ワード部で教師の職にあった時のことでした。定員会の会長に欠員が生じ、私はその任に就くだけの資格が自分にはあると思いました。しかし選ばれたのは別の若い兄弟でした。私はその兄弟の資格や能力を疑うことはしませんでした。むしろ自分は神権者として必要なふさわしきや備えに欠けるところがあるのではないかと真剣に自問しました。そして生活を常に整え、自分自身を改善して、どのような召しであれ、将来きたるべき召しに備えるようにしたのです。私たちは末日聖徒として、自分自身の弱点なり欠点にいつも気を配り、克服していくようにしなければなりません。さもなければその欠点によって道を誤ることになるのです。アロンはこの点について良き模範を示しました。

第3に権能を正しく使うこと。

神権者は誇りと謙虚さのバランスをとり、適切に使分けなければなりません。各々の神権者は神の子供としての誇りと、弱点を持つ人間としての謙虚さをうまくバランスをとって行動しなければなりません。また神権者であるならば、より高い役職を求めるといような誘惑に屈することなく、神権の権能を引き受けてそれを行使できなくてはなりません。

ここにおいてもアロンは模範を示しています。アロンが第モーゼの予言者としての役職を求めたなどという記録はどこにもありませんし、権能を与えられた時に弱々しくて力を十分に出せなかったなどということもありませんでした。モーゼを代弁してパロに話をするように命じられた時には、立派にその責任を果たしました。彼は与えられた責任をしかと我が身に引き受け、自分

の召しの範囲で行動したのです。(出エジプト4:30; 5:1-4; 6:13; 7:1-2, 6-10, 19-20; 8:5-6, 16-17; 10:3; 11:10参照)アロンはシナイ山のふもとでイスラエルの民を管理した時に、指導者としての責任を果たすことができませんでした。モーセが山中にいる間、黄金の牛を作ってくれるように主張するイスラエルの民を制することができなかつたのです。(出エジプト24:14; 32:19-24参照)しかしながらモーセから叱責されると、アロンとレビ人は主に従うことを拒んだ人々を野営の地から一掃しました。(出エジプト32:26-29参照)その後もアロンはイスラエルの民の不平にたびたび耐えなければなりませんでした。決して再び彼らを統制できなくなるということはありませんでした。

シナイ山でのアロンの経験について考えると、私にもこれと似たような体験があったことを思い出します。それはカリフォルニアのフォートアードの陸軍小隊で分隊長をしていた時のことです。私たちの小隊は特別な査察のため準備をしていました。兵士たちは兵舎を掃除してから携帯用具を手入れするため外に出ていきました。小隊長は4人の分隊長を兵舎に呼び入れ、仕事がまだ残っているともしました。彼は私に、部下を何人か呼んでその仕事をさせるように命じました。私は窓を開け、自分の分隊の3人の部下に声をかけました。「カーリングトン軍曹殿が君たちにここに来て、もう少しばかり仕事をして欲しいと望んでおられる。」私が向き直ると、カーリングトン軍曹はこう尋ねました。

「君は部下に今、何と言ったのかね。」私は「ハッ、自分は部下に『小隊長が、ここに来て仕事をしてくれるように望んでおられる』と言ったのであります。」と答えま

した。「そうではない。私は君が部下を呼んでその仕事をさせるように言ったのだよ。どうするかわかっているな。」カーリングトン軍曹の場合、「どうするかわかっているな」とは、「すぐ腕立て伏せを100回せよ」という命令なのでした。その時は軍曹の意図するところがわかりかねて当惑したのですが、数時間後に軍曹の教えてくれたことがわかってきました。私はその兵士たちの分隊長であり、彼ら呼び入れて仕事をさせる権限を持っていたのです。それにもかかわらず私は部下に仕事をさせるためカーリングトン軍曹の名前と権威を使ったのです。

教義と聖約58章26節から28節に、私たちはすべてのことについて命ぜられるべきではなく、多くのことを自らの自由意志によってなさなければならないと記されています。私たちは自由意志と勇氣をもって自分の召しを全力を尽くして遂行すべきであり、後ろ盾を得るためや、すべての問題を解決するために他人の権威に頼ることは慎まなければなりません。

第4に才能を伸ばすこと。

アロンはイスラエルの民とエジプトの王であるパロに話をするという召しを全力を尽くして遂行しましたが、その際に管理の職を果たすために必要な才能と霊的な賜を伸ばしました。たとえば、啓示をどのように受けるかを学んでいき（出エジプト12：1；レビ10：8；11：1；13：1；民数18：1参照）、ついにシナイ山において神とまみえるまでになったのです。（出エジプト19：24；24：9—10参照）アロンがあまりにも見事に自分の才能を伸ばしたので、ひとつの大切な霊的な賜が彼の名にちなんで「アロンの賜」と呼ばれるようになりました。オリヴァ・カウドリは、末日の神権時代において、この賜を与えられることを約束

された神権者でした。（教義と聖約8：6—11参照）

モーセが主の予言者あるいは代弁者であったように、アロンはモーセの代弁者でした。それゆえ彼はモーセと主の代弁者として主のみ言葉を伝え、イスラエルの民に教えを施す責任を負っていたのです。（レビ10：11；申命33：10参照）モーセやエノクを初めとする多くの予言者は、与えられた召しにおそれを抱き、主のみ言葉を正確に伝える自分の能力に少なからず不安を感じました。予言者は、神のみ言葉を理解するだけではなく、それを人々に伝えなければならないのです。弁舌の才能を持つアロンは、この恐ろしいまでに重要な責務を遂行したのです。

第5に試練に耐えること。

アロンは神の任を果たす間に何度も失意に陥りました。イスラエルの民が黄金の牛を作り、悪事にふけるのを目撃したり、後には幾千もの民が疫病や神の怒りによって死ぬのを見たりしました。（民数11, 14, 16章参照）また、個人的な悲劇や失意も経験しました。4人の息子のうちふたりまでが、主から下された火によって焼死したので、主から下された火によって焼死したので。（レビ10：1—2参照）さらに姉のミリアムがらい病にかかりました。（民数12：10参照）しかし、このような試練のただ中であっても「アロンは黙して」（レビ10：3）いました。そして、自分の弱点の赦しを神に請うたのです。（民数12：11参照）ある時には、イスラエルの民から、あまりにも権威を笠に着ていると責められました。（民数16：3参照）アロンとモーセは岩から水をわき出させた時に、主を十分に信頼せず、主の個々の命令に忠実に従わせなかったとして主から懲らしめを受け、イスラエルの民と共に約束の地に入ることは、かなわないと言

われたこともあります。(民数20:12-20参照)アロンの生活は納得のいかない事柄やすぐには報われない事柄の連続でした。しかし、彼は証を弱めたり、怒りを抱いたり、あるいは主に逆らったりはしませんでした。むしろより強く成長し、ついには管理の職を完全に果たしたのです。

私たちもアロンのように神の公正さに対する信頼を常に失うことなく、たとえすぐには来なくとも、やがてもたらされる祝福にふさわしい生活をしなければなりません。ドイツのツーリングで会ったひとりの好青年のことを思い出します。その青年のために私は同僚と共に熱心に教え、断食し、祈りました。しかし、彼の両親はバプテスマを受ける許可を与えてはくれませんでした。やがて彼も教会に対する興味を失ってしまいました。それから13年たって結婚に失敗した後、彼は再び教会に目を向けました。そして、仕事で人と会うためにシカゴに来た際に、彼はソルトレーク・シティーに足を伸ばし、はからずも私は彼にバプテスマを施すという大きな喜びを味わうことができたのです。

第6に管理の職を遂行すること。

アロンは召しを遂行する際に、自分に与えられた仕事を几帳面に果たす必要がありました。とりわけ、幕屋や(出エジプト28、29章参照)さまざまな犠牲をささげることに関しては(レビ5:7参照)、細心の注意を払っていました。

レビ記10章にはアロンのふたりの息子がその管理義務を的確に果たさなかったことが記されています。ふたりは幕屋の黄金の祭壇に主に受け入れられない^{くんこう}薫香をささげ、主により打ち倒されたのでした。明らかに彼らは多量の酒を飲んでいたのでした。と言うのはその事件の後、主はアロンとその

息子たち、そして後の世代のレビの祭司に、幕屋に入る時や教える時には決して酒を飲んでほならないと命じられたからです。(レビ10:8-11参照)ふたりの死に際し、アロンと残された息子たちは、喪に服して嘆くことも葬式に参列することも許されませんでした。(レビ10:6-7参照)さらに彼らは祭壇の上の素祭の残りを食べるように命じられました。(レビ10:12-15参照)アロンとその息子たちはこれらの厳しい戒めを守りました。

今日アロン神権者として主に仕える兄弟たちは、聖餐の祝福やパス、バプテスマ、その他の儀式を行なう際の正確な手順を学びます。私はアロン神権者として、また後にはアロン神権プログラムの指導者として、なぜそのような手順を踏まなくてはならないのか理解できなくとも、指導者が話す通りにすべての神聖な儀式を正確かつ忠実に行なうことの必要性を身にしみて感じるようになりました。

第7に奉仕すること。

アロンは40年間にわたって時間と才能と精力とを神権の業につき込みました。彼が指示を与えた主な責任には次のようなものがあります。

- a. 幕屋での礼拝(レビ24:5-9; 出エジプト30:7-8, 30参照)
- b. ある種の事柄について裁く(レビ13, 14章参照)
- c. 幕屋の備品、とりわけ契約の箱に気を配る(民数4:5-20参照)
- d. 洗い清めとバプテスマの儀式を施す(出エジプト40:12; 教義と聖約84:26-27参照)
- e. 犠牲と捧物とをささげる(レビ6:12; 9:15-22; 出エジプト29:38-44参照)
- f. 律法と契約を教える(レビ10:11; 申

命33：10参照)

g. 幕屋を保護する(幕屋の移動も含む)

(民数3：5—13；23：27)

h. 戦いや宗教行事の際に銀のラッパを吹く(民数10：1—8参照)

以上の聖句を読んでみると、アロンがこれらの責任に費やした時間と努力が明らかになってきます。どの記録にも、アロンが果てしなく続く仕事に対して、またあまりにも多すぎる召しについて不平をもらしたとは記されていません。あるいは、もっと別なことを楽しむ時間が欲しいと主張したという記録もありません。アロンは死に至るまで王国のために働き尽くしたのです。

プロボ第13ワード部で17名の教師のアドバイザーをしていた時のことですが、私は彼らのために余分な時間と労力をさくことをためらったことがありました。それを思い出すたびに赤面する思いです。確かに私の家では子供が増え、職と住居が変わり、他になすべきことがたくさんあったのですが、これらの若者に対する責任を忘れてはならなかったのです。私が彼らを知り、愛するようになった時、彼らの直面する課題や問題は、私自身のものとなってきました。そして、しだいに責任感から奉仕するのではなく、愛と思いやりの心で奉仕するようになっていきました。

アロンは捧げ物と犠牲の綿密な制度を管理しましたが、今日の私たちには主のために自分を捧げる機会が数多く与えられています。他になすべき義務があっても、老齢であっても、あるいは毎日の仕事に追われていたとしても、主の業を行ない、神の王国建設のために働くという責任を免除されることはないのです。私たちがどんなに尽くしたとしても、天にまします父なる神と救い主に比肩できるほどに自らをささげることが到底できないことです。

第8に指導者を助けること。

聖典にはモーセとアロンが一緒に記録されている場合が非常に多いため、ふたりを分けて考えることはできないように思えるかもしれません。旧約聖書の初めの五書がモーセによって書かれていることを考えれば、アロンがモーセを誠心誠意で支持したことが察せられるでしょう。アロンは常にモーセの傍らにいて、心から喜んで主に仕えました。そのことによって当時の神権時代の指導者であり、主の予言者であったモーセは、自分が強く支持されていると感じたに違いありません。アロンの勤勉な働きのお陰で、すべての宗教行事は完璧に行なわれ、イスラエルの民にその恩恵をもたらしました。このことによって、イスラエルの民に正しい宗教的な環境が与えられたばかりでなく、モーセにとっては、悩みと心配事が著しく軽減され、他の人に委任できない責務に力を集中することができたのでした。

アロン神権の祭司は、祭司定員会の会長である監督を支持しようと努力する際に、同じようなチャレンジを経験します。祭司が管理の職を全力を尽くして遂行するならば、監督は他の分野に努力を集中することができます。副監督や他の人々も同様にして、監督の多くの悩みを軽減し、彼がイスラエルの判士、ワード部の霊的面のアドバイザーとして、よりよく働けるように助けることができるのです。

第9に従う人々を教えること。

アロン神権者に与えられている主な責任のひとつに、教え、警告し、勧告して、「キリストに来る様すべての人々を勧誘」することがあります。(レビ10：11；申命33：10；教義と聖約20：46—59参照)アロンは祭司とレビ人に彼らの義務を教え、自分の息子

エレアザルが大祭司の職を引き受けることができるように訓練し備えました。アロンの死に際して、指導者の交替は問題もなく円滑に行なわれましたが、それはどれだけアロンが、他の者が祭司の役割を継続していけるよう準備したかを物語るものです。

私が監督をしている学生ワード部では、ほとんどの会員に彼らの召しと責任について教え、訓練しなければなりません。出席している大学1年生は意欲に満ちていて、熱心に主に仕えようとしています。しかし、往々にして、ワード部の召しを果たすだけの知識と経験を欠くことがあります。副監督はふたりとも優秀な指導者であって、ワード部のプログラムを効果的に管理運営し、ワード部の会員たちを人との交わりの中で訓練しています。その間私は会員と主との交わりを改善し、深めることに力を集中することができます。このように私たちは一体となって、ワード部の全会員にこの世での義務について指導しています。

主の教会の会員である私たちは、福音の教義とクリスチャンとして生活することの価値を、言葉と行ないをもって人に教えるという重大な責任を負っています。この世的な考え方が横行し、多くの家族が崩壊していくこの時代にあって、私たちは神からいただいた価値基準を常に守り、他の人々に神の子供として生きるよう教えなければなりません。

第10に進歩の度合を測ること。

主はアロンの存命中に、またその後においても、彼の献身的な働きを認められました。アロンのつえを奇跡的に芽ぶかすことによって(民数17:5—9参照)、そして彼の捧げたいけにえを聖なる火で焼き尽くすことによって(レビ9:22—24参照)、神はアロンの神権の権能を明らかにされたのです。

主はまた、モーセを通してアロンに神権を授け(レビ8:4—13; 教義と聖約132:59参照)、義になかった生活をするならば彼の子孫が永遠に神権を保持する権利を有するであろうと約束されました。(出エジプト29:9; 民数18:1; 歴代上23:13; 教義と聖約68:16—21; 84:27参照)後に主は、神権のひとつの区分あるいは種類をアロンの名にちなんで命名され(教義と聖約107:1—20参照)、それによってアロンの献身的な働きを喜んでおられる旨を示されたのです。

私には、自分が神の前にどれだけ働いているかを測ることは難しいことです。私はみたまが靈感や指示や導きを与えて下さる微妙な方法に注意を払い、祝福を数え上げ、あるいは自分が行なった奉仕の業を吟味し評価しようとしています。しかしながら、神権者としての働きが一番良くわかるのは、自分の家族の状況を見る時なのです。もし私が神権を愛し敬うならば、私の家族も同じように神権を愛し敬うでしょう。アロンの模範を見ると、どれだけ見事に神権を敬うことが可能なかがわかります。アロンは、後の時代の神権者とその家族に対して、素晴らしい模範を示しているのです。私たちもアロンのように、自分に与えられる召しを効果的かつ忠実に遂行したいものだと強く思います。

ビクター・L・ラドロウ兄弟は、ブリガム・ヤング大学で古代聖典学の准教授を務め、ユタ州プロボにある彼のワード部では執事定員会アドバイザーと日曜学校の教師を兼任している。

クリスマスプレゼント

レイン・H・ダーテン

3 人のインターン生から、私はもう良くなったので明日、つまりクリスマスの前日には家に帰り、休暇の後で病院に戻って来るようにと言われていた。私は医長のシャーマン先生が後で回診に来た時に、このうれしいニュースの最終的な確認をしてくれるだろうと確信していた。彼はついに現われて私のベッドの傍らに立った。彼の診察は機械的だった。実際、それはひどく機械的だった。

「良くなっていますね。本当にいいですよ。」そう言うと、彼は私に背を向けて部屋を出ようとした。私がクリスマスのために家に帰ることについては何も言わないのだ。

私は驚きをぐっとおさえて尋ねた。

「あしたから何日か帰ってもよろしいのでしょうか？」

私の言葉の唐突さが、灰色のまゆ毛を額の上でこころもちつり上げた動作に表われていた。彼は、ゆっくり答えた。

「お気の毒ですが、少なくともあと2週間は無理でしょう。」

彼の声は親切だった。しかし、反論を許さない確固とした響きを持っていた。やが

てシャーマン先生の姿が私の視界から消えた。この何日かの間ずっとかじりついてきたひとつの希望がもろくも崩れ去ってしまったのだ。

一体どういうことなのだろう。こんなことがあっていいものだろうか。そのことが起こったのは、伝道に出て1年と少したった頃だった。私は召しを受けて幸福だった。ニューヨーク市で福音を教えるのは、チャレンジに満ちていて楽しい。それに近頃では爽りなるものも見え始めたのだった。そして私は健康を祝福されていた。少なくとも、2週間前に右腕が突然数分間麻痺し、2時間以上も口がきけなくなった時までは。

私は、原因を調べるためにブロンクスの病院にかつぎこまれた。病院でも、私に何が起こったのかだれもつかめないうだった。私は、脳卒中や、発作や、腫瘍についての会話がさきやかれるのを耳にした。何十回ものいつ果てるとも知らぬ検査が私をひどく疲れさせ、病院に入って来た時よりもっと状態を悪くした。求道者がいる時に病院で時間を浪費するとは何たることか。しかも最初赴任した地で、このような不可

解な災難に襲われるとは。

私はユタにいる家族に毎晩のように電話して、私は大丈夫だから心配することは何もないと言って安心させた。母はすぐにでも飛んで来たい様子だったが、彼らに余裕がないことはわかっていたし、第一、母が病院に来たら、私のやるせなさが募るだけだ。そんなわけで、私は病気のことを冗談半分で話し、なるべく親に心配をかけないようにした。

ブロンクスの小さな病院は、神経学の問題に関する研究で有名であるが、その時の私には地上で最も寂しい陰気な場所だと思えてならなかった。私はここで一晩過ごただけでそれを確信した。日数が重なるにつれ、クリスマス休暇に帰るといふ望みは私の苦しみを耐えられるものにしてきたのである。クリスマスの季節のあのうきうきした気分のことを考えると、退屈や不快がまぎれるのだった。

「少なくともあと2週間は無理でしょう。」
シャーマン先生の宣告は私の心に突き刺さり、私の心の中は郷愁の思いと窮極感で一杯になっていた。子供の頃、私は何カ月も前からクリスマスを夢見たものだった。そして少年になっても、子供らしい楽しみがほんの部分的に、友人や家族—そしてイエス・キリストへのより深い感謝に取って代わったにすぎないことに私は気づいていた。

ベッドの中で15分は動かずに横になっていたのだろうか。私はおもむろにラジオに手が届くように体の向きを変え、スイッチを入れた。ラジオは、この病院に来て以来、

独りぼっちの部屋での唯一の楽しみであり、気晴らしだった。しかし、ラジオを聞くことさえ、私の気持ちを暗くした。私の失望は、憤りと怒りに取って代わっていた。みじめだった。私はそうした気持ちが私の心の中の腐った井戸から出てきて、私の個性を変えてしまうように感じていた。

それにもかかわらず、私は頑固にラジオを聞いていた。ラジオの音の方が、廊下や近くの台所から聞こえる日常の音よりもまだまじりだつたからである。どの局でもクリスマスキャロルを流しているようだった。幸せな歌声が、喜びを世界に告げていた。歌手たちは、私に、何度も何度も「休暇には家ほど良い所はない」ということを思い出させた。

私は喜びに満たされていなかった。私は家にいないのだ。このニューヨークの宣教師や会員の友人たちの所にさえいることができないのである。私にとって今年のクリスマスはないようなものだった。

12月23日はゆっくりと過ぎ、12月24日になった。その日はクリスマスイブだった。病院はシーンと静まりかえっている。患者の多くは、クリスマスに家に帰るのを許されていたのだ。しかし、私は違う。私は孤独で、小さく、取るに足らない存在なのだ。

私は、心の中であざけりながらラジオのキャロルを聞き、その夜が早く過ぎてくれないかと懸命に念じながらふさぎこんでベッドに横たわっていた。8時を過ぎた頃ドアをノックする音がする。ドアが開いて顔を見せたのは、私が教えた最近の改宗者の

ひとりであるエド・カザコフだった。彼は抱えきれないほどたくさんの包みを持って、ニコニコと笑っていた。そして元気よく「メリー・クリスマス」と言って挨拶し、包みを置いて暖かく私の手を握った。

今夜彼を家族と離れた所で見るのは驚きだった。今夜はクリスマスイブだが、ユダヤ教では、ハヌーカ祭で、特別な家族の時間なのだ。エドがキリスト教と回復された福音に改宗したことが家庭で問題になっていたので、彼は、家族に引き続き愛と尊敬の念を抱き続けていることを知らせて安心させるために、可能な限り多くの時間家族と過ごすようにしていたのだ。

エドの顔はその夜、話している間、光を放っていた。彼の温かさと熱意とその純粋な心は、彼を24歳という年よりも若く見せていた。彼は教会の仕事や福音に対する喜びや、ミューチュアルの友人や家族に対する愛と関心について話す間中、絶えずニコニコとほほえんでいた。数時間もの間、私たちはおしゃべりしたり、ラジオのキャロルを聞いたり、彼が持って来てくれた贈り物を開けたりした。贈り物のいくつかは彼からのものであり、他のものは集めたり他の友人たちから送られて来たりした物だった。

彼が帰った後で、私は、今頃彼は地下鉄の駅で次の電車を待っているのだろうか、それとももう車中の人となったのだろうかなどと考えながら何時間かを過ごした。私はまた人気のない部屋を見渡した。プレゼントの包装紙がくずかごからこぼれ落ち、ぽつんとひとつ置かれたいすの上には開い

た贈り物の山があり、私のベッドのまわりには一列に赤と白のキャンディのステッキが結びつけられていた。確かに、私がいる病室は前とは異なっていた。しかし、それ以上に異なっているものがあった。私の心が深い感動に満たされていたのだ。私の心は、彼の来訪からぬくもりを得ていた。そう、永遠に楽しむことのできる豊かな祝福を神に感謝すべき時に、私はただつかの間のことに心を支配されていただけだったのだ。

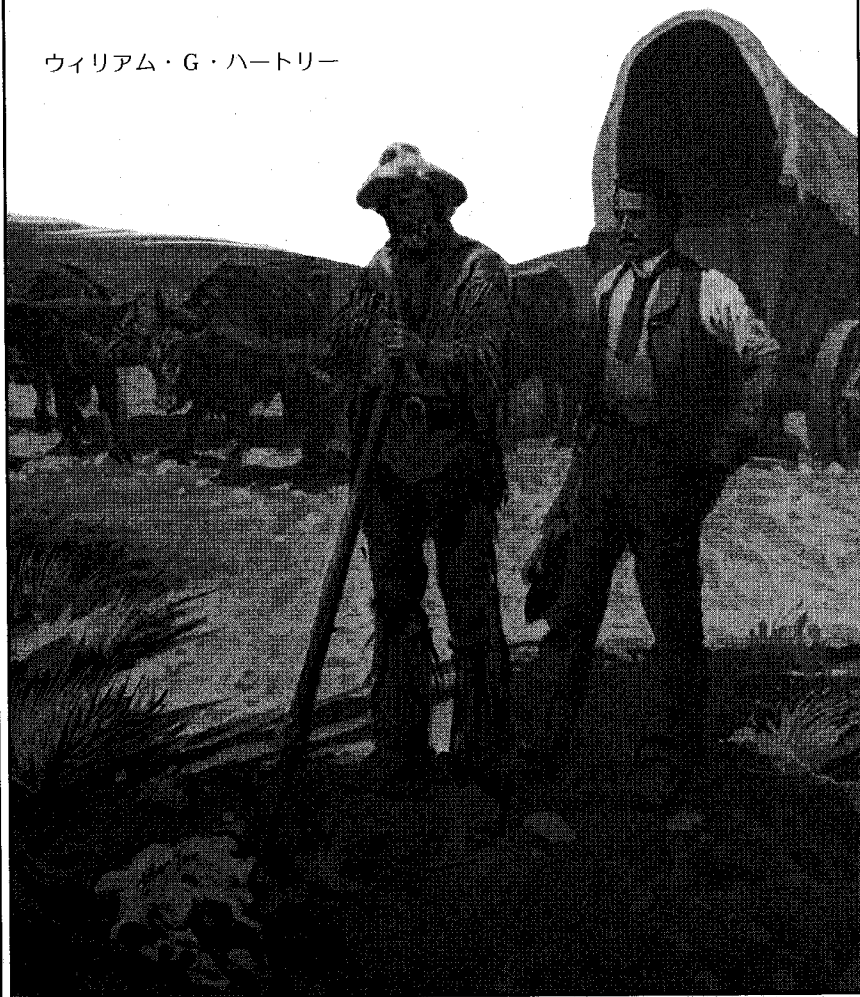
これはエドにとって初めてのクリスマスだった。そして彼はそれを私に与えたのだ。彼の誠意と愛ある思いやりは真のキリスト教精神の良い模範だった。彼は私のために自分を犠牲にしたのだ。彼は私のことを心にかけていた。つまり、クリスマスの意義について深く認識していたのである。私はそれをずっと無視してきたのだった。私が、得られないと思って悲しんでいた楽しみは、真に重要なものではなかったのだ。それらは、それだけのもので、作りもので、浅薄なものだった。

次の何時間かの間、私は暗闇の中に横たわり謙遜な気持ちで意味を考えながらラジオのキャロルを聞いていた。私は、海の向こうの大陸での2千年近く前のある夜のことを考えていた。私はその夜生まれた幼な子の生涯に思いをはせ、その誕生を記念する日があずに迫ったことに胸がわくわくするのを覚えた。私はふたりの兄弟たちから贈られたクリスマスプレゼントに感謝し、安らかに眠りについた。

あるイギリス海軍兵 の冒険

第II部

ウィリアム・G・ハートリー



ウィリアム・ウッドの十代はイギリス海軍兵として幕を閉じた。クリミア、中国での戦争体験、そして、リトリビューションでの3年をかけた世界一周の航海を終え、彼はテムズ河口にあるシェピー島で家族との生活を楽しんでいた。彼はくつろぎの時を過ごすと共に、親戚の人々との旧交を暖めた。5年前彼が教会に入った時には、それを理解しようとしなかった人々ばかりであった。

家に帰って2週間してから、ウィリアムは教会の最寄りの支部を訪ねた。ちょっと散歩に出かけるのだろうと軽く考えて妹が

一緒について行った。ところが着いた先はシェアネスの「汚い裏通りにある小さな2階の一室」で行なわれていたモルモンの集会であった。ウィリアムはその支部長や旧知の会員たちから暖かく迎え入れられ、集会の席で海での様々な体験を話すように求められた。彼の言葉を借りると、「相も変わらずモルモンで続けた私を見、その話を聞いて」妹は啞然あとしていた。

ウィリアムは除隊の時に俸給として80ポンドをもらっていたが、それには手をつけずに取っておくために肉屋に職を求めた。そして彼の雇い主となったのは、何年前か前、



エリザベス

末日聖徒になったということによって彼を首にした、モールドンのあのブラクソール氏その人だったのである。ウィリアムはモールドンに戻り、そこで1年間働いたが、その間片時も忘れず彼の胸中にあったのは、シオンへの移住、そして妻となる人を見つけるというふたつの目的であった。

ウィリアムがモールドン支部の支部長の娘で、16歳になる魅力的な女性、エリザベス・ジェントリーに恋心を覚えたのは、1862年の初めの頃であった。彼女の母親は1853年に、エリザベスは1854年、そして鍛冶職の父親はその翌年に、それぞれ教会員となった。ジェントリー兄弟とウィリアムは同じ年にバプテスマを受け、ウィリアムが海軍に入る前は、共に祭司としてモールドン近辺を説教して回った間柄であった。

ウィリアムとエリザベスは婚約をしてから、シオンへの移住について、巡回長老のフランシス・M・ライマンに相談した。ライマン長老は後に十二使徒評議員会の一員となった人であるが、このふたりに当時彼が組織を進めていた移民団に加わるように薦めた。

ふたりはロンドンで移民団に加わる他の聖徒たちに合流し、そこからリバプールへ行き、教会の移民組織が特別にチャーターしておいたウィリアム・タブスコット号という船に乗り組んだ。この航海でこの船にはイギリス、デンマーク、スウェーデンから800を数える人々が乗り組んだが、その規模は末日聖徒の移民団の中でも最大のもののひとつであった。ウィリアムはこの時

の模様をこう書いている。「ありとあらゆる種類の台所道具を抱えて乗船する人、わら製の寝具を頭に乘せて運ぶ人、様々な荷物や食物を入れたかごを手にした人、その様子はとても面白いものであった。古びた家具……先祖の肖像画まで持っている人もいた。」

しかし、人々が特に任命された管理長老を頭に幾つかのワード部に分けられ、わずかな間に整然とまとめられていく様は、ウィリアムにとって驚くべきことであった。「モルモンでなかったら、これだけの数の人がこんなにも整然と落ち着くということとはとても考えられないことである」というのが長い海上生活を経験した彼の見方である。「主のみたま以外にあのような一致した状態を生み出すことはできない。」船がリバプールを出航したのは1862年5月13日のことであった。

各家族にワードティーチャーが割り当てられ、ウィリアムもライマン長老から、エリザベスを含めて7人の世話をしようという責任を与えられた。ウィリアムは彼らに配給される食糧の確保、調理の準備など、ほかにも彼らに必要なことを行なった。悪天候と船酔いの連続の遅々とした航海も、6週間目にニューヨークのキャッスルガーデンに着いて終わりを告げた。移民団は検疫を無事通過し、汽車でセントルイスへ向かった。当時アメリカは南北戦争が激化している時で、「私たちは何度も旅程を変更し、乗り換えを余儀なくされた。ある所では貨車に押し込まれたこともあった。その貨車

というのが豚を運んでいたもので、掃除もされていないのである。それから何日か私たちは鼻と言わず口と言わず、そのほりに苦しめられ、息が詰まるような思いだった。」

ミズーリ川で彼らは1隻の小型蒸気船に乗り換えた。ところがカウンスラフスの近くに着いたのは真夜中であった。あたりが真暗闇のためか、気がせく人々の下船と荷下ろしは大混乱に陥った。夜が明けて、疲れ切った彼らは散らばった荷物の中から自分の物を探し出し、教会の移民団のための野営地に集った。そこで彼らは移住の責任者ジョセフ・ヤングの指揮の下に、10人隊、50人隊、100人隊に組織された。ウィリアムは軍隊での長い経験を買われて警ら隊の隊長を命じられた。

荷を運ぶ車や家畜の準備、荷物の積み込み、食糧の買入れと保存のための荷作り、御者の訓練と、なすべきことは数々あった。それらの準備に追われていたある時、その野営地はものすごい嵐に襲われ、激しい風、滝のように降る雨、そしてすさまじい雷に見舞われた。驚いた家畜は先を争って逃げ出し、大きな被害をもたらした。雷では少なくともふたりの聖徒が死亡し、ほかにも幾人かが重傷を負った。あふれ出た奔流で、溪谷は所によって3メートルもの深さに達した。この嵐の時、警ら隊隊長のウィリアムは、ぼろぼろのテントの中で、ある姉妹が出産するのを手助けするように頼まれていた。この母子はユタにおいて彼の終生の友となった。移民団が嵐の被害から立ち直るまでには2、3日を要した。そしてその激

流に飲み込まれた多くの荷物はそのまま失われてしまった。

家畜の扱いが上手なウィリアムを見込んだクーパー兄弟という人が、調教師とユタまでの御者役として彼を雇った。その代わりにウィリアムとエリザベスをただで運んでやるという条件であった。ところが数日の内に、この雇い主は、シオンに行く気はない、近くで農場をやるがそれを手伝わないかと言い出してきたのである。ウィリアムはこれを断わり、エリザベスとふたり食糧も水もないまま車から追い出されてしまった。

立ち往生していたふたりにとって幸運なことに、ちょうどその夜、ライマン長老とチャールズ・C・リッチが西の方から来て、そこを通りかかった。彼らはウォーデルという家族の人々とかけ合って、エリザベスを40ドルの代金でユタまで乗せていってもらうように手はずを整えた。ところがライマン長老はウィリアムに、フローレンスまで戻って、D・F・キンボールの荷物運搬隊の援助をして欲しいと言われ、心ならずもしばしの別れということになってしまった。

「婚約者と別れて、もと来た道を引き返す、これほど辛い試しはなかったと思う。しかし、私は心を抑えて彼女に別れを告げ、全財産の半分をその手に握らせると4輪馬車に乗り、そこを後にした。私の心は悲しみと、これから先どうなることやらという気持ちで一杯だった。リッチ兄弟は涙にくれる私を見て、元気を出し、信仰を持てば

すべてうまくいくと言ってくれた。」

そしてその旅の第一夜の野宿の時、ウィリアムはほかのふたりを抱腹絶倒させることをしたのである。そしてそれは後々まで話の種となってしまった。ウィリアムが眠るために着替えを出そうと荷の中に手を伸ばしたのだが、彼が取り出したのはレースのふちどりをした婦人用の服だったのである。ふたりの同僚は笑い転げた。ウィリアムは自分の荷物とエリザベスの荷物を間違えて持ってきてしまったのである。しかしウィリアムは幸運だったと言えるかも知れない。と言うのは3カ月の間、同僚たちが固い地面の上で寝ていた時に、ウィリアムは荷車の車輪の間に水兵用のハンモックを吊って、ゆっくりと休むことができたのである。雨の夜にはハンモックに身を横たえて、厚地の布をかぶるだけでよかった。

移り変わる風景も旅も、日ごとに退屈なものとなった。チムニー・ロックの辺りでは牛が何頭か病気で死んでしまい、1日に進む距離が落ちてしまった。ウィリアムは、ユタにたどり着くことも、エリザベスに再会することも、もうかなわないのではないかと考えるようになった。

しかし10月のある土曜日、ウィリアムとその一行は、グレート・ソルトレークに沈む美しい夕日と、眼下に広がる碁盤目状に区切られた美しい街に目を奪われながら、ソルトレーク・シティーを見下ろす小道を下ったのである。街に近づいた所で、近くの小屋の住人でウィリアムに手を振る人がいた。それはエリザベスと一緒にユタに来

たウォーデル姉妹であった。ウィリアムは彼女の所に駆け寄り話を聞き、自分の期待がもの見事に裏切られてしまったことを知ったのである。彼女の話によると、エリザベスの彼への思いはとうに冷え切り、一夫多妻をしているある男性との結婚を思い立ったというのである。

「私は雷に撃たれたような思いがした」と彼は後になって書いている。打ちひしがれた彼は隊の一行と峡谷をさらに進んで街まで行ったが、夜になってウォーデル家へ取って返した。婦人は自分の娘と結婚しないかとウィリアムを説得したが、彼の耳には入らなかった。そしてこう言ったのである。「決心しました。私は昔のあの愛を取り戻して見せます。」

モールドンから来た友人たちがセンタービルに住んでいたので、ウィリアムは彼らに会うために、週が明けるとすぐ20キロ近くの長い道のりを徒歩でそこに向かった。着いたのは夜であった。そして「跳び上がるほどにうれしかったのは、私の心の人が手作りの長いすに横になって眠っているのを見た時です。身なりはまったくひどいものでしたが、それでも元気そうでした。目を覚ました彼女の喜びようもひと通りのものではありませんでした。」それからエリザベスの話を聞くと、ウォーデル姉妹は彼女を自分の息子と結婚させようとしたが、断られると、ユタまで連れてきた代金の40ドルを全部払うまでと言って、衣類や寝具をすべて差し押さえ、追い出してしまったというのである。それから、ウィリアムを

自分の家の者と結婚させようとして、エリザベスの愛はもう冷えてしまったなどという話をでっちあげたのである。

ウィリアムはソルトレーク・シティに戻り、スプリングビルまで車を駆り、そこで3カ月分の給料を受け取った。そしてもう一度ソルトレークへ歩いて行き、40ドルの支払いを済ませ、自分とエリザベスの荷物を持ってセンタービルへ帰った。それから2週間、かねて婚約していたふたりは結婚したのである。

ふたりは一生懸命働き、レンガ造りの素晴らしい家を持つまでになった。ソルトレークで始めた肉の商売も繁盛し、1867年にはエリザベスの家族が移住して来るための費用を都合してやることもできた。しかしその翌年には、アリゾナ植民という大変な使命を果たすために、家も仕事も手離すことになった。4年後、召しを終えて帰って来た時には無一文の状態、山腹^{うが}を穿って作った粗末な所に寝起きした。そしてそこからは、かつて彼らの物だった家が見えたのである。

そして歳月が流れていったが、1880年、ウィリアムは再びうまくいっている商売と育ち盛りの子供たちを後にして、イギリスへの伝道の召しに応えたのである。その召しも終わり近くになった頃、彼はちょっと違った意味ではあるが、成功した伝道の例について述べている。

「私は父母、兄弟など愛する人々に福音を宣べ伝えた。身内の中でそれを受け入れた者はひとりもいなかったが、彼らもその

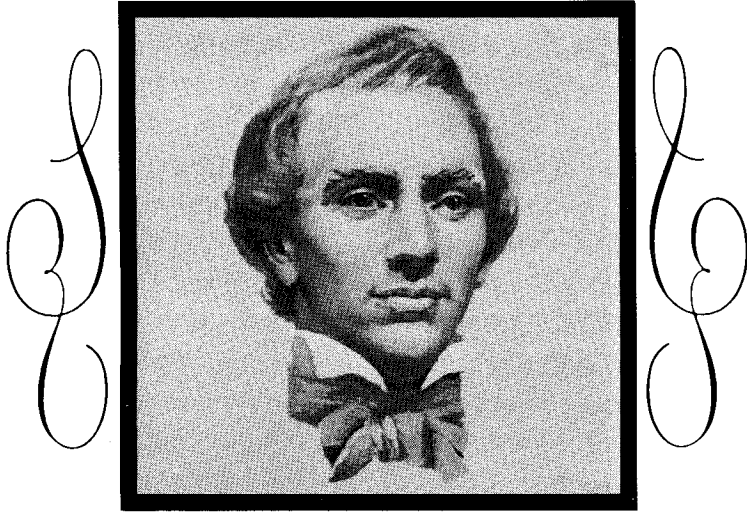
教えが論駁^{ろんぱく}できないものであるということ^{を認めざるを得なかった}。彼らは27年前には私の将来についてとやかく言ったが、今ではそれが的はずれなものであったと感じている。……親戚の者たちも皆、私だけでなく一緒に訪問した長老たちに対しても、手厚いもてなしをしてくれた。神はそのことで彼らを祝福して下さるに違いない。」

6年後、彼は召しを果たして帰還した。エリザベスは42歳の時に13番目の子を産んだが、日を経ず母子共にこの世を去ってしまった。後にウィリアムは再婚し、家族共カナダへ行き、そこで名を成した。ウッド家の名は手広い牧場経営とかん詰め業で知られている。ウィリアムの息子のエドワード・Jは長年の間ステーキ部長、アルバータ神殿の神殿長の職にあった。

ウィリアムはこの世を去る前の年、改宗者、水兵、開拓者、宣教師としての自分の経験を通して、教会の若人が「それまで福音を学んできた場を離れざるを得なくても……放縦と悪につながるいかなる誘いにも屈することのないように」ということを学んでくれるようにという思いを込めて、波乱に富んだ生涯を記録した。「神のしもべから福音を宣べ伝えるように召された時でも、戦争の恐怖に囲まれた時であっても、常に祈りなさい。あなたの永遠の父なる御方に心の中で祈りをささげるということを決して忘れずに。神はあなたをお見捨てにはならない。」



小さなお友だちへ



予言者の クリスマス

12月には、すくい主のたん生を、
おいわいしますが、予言者ジョ
セフ・スミスも、1805年12月23日に、
生まれています。予言者、そして教

会の大管長となってから、ジョセフ・
スミスは、どんなクリスマスをすご
していたのでしょうか。予言者の日
記を、よんでみましょう。



1835年、クリスマス。一日中家にいて、かぞくといっしょに楽しい時間をすごす。私にとっては、ゆつくりかぞくとすごせる、年にただ一度のときである。

1838年、弟のドン・カルロスと、いとこのジョージ・A・スミスが、2400キロもの道のりを、船にのったり、歩いたり、伝道からかえってきた。家の近くまできたとき、ふたりは、ほうとにおそわれ、2日も引きずりまわされて、やつのことではげてきたのだった。

1841年、クリスマス。ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、オルソン・プラット、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョン・テイラー夫妻、それにウイラード・リチャー

ズは、ハイラム・キンボール家で、夕べのひとつきをすごした。夕食がすむと、キンボール氏は、ノーブーの彼の地所の西にある土地を、十二使徒一人一人に分けあたえた。

1843年、けさ1時ごろ、あるイギリス人の姉妹とそのかぞくが、「目ざめよ、地のたま、み使いとともに歌え……」と歌う声に目をさました。私のおねの中に、よろこびがこみあげてきた。私のかぞくも、きんじよの人々も、みな起きてきて、そのセレナーテを聞いた。私は、彼女たちが来てくれたことを、天父に感謝したいと思い、彼女たちを、主のみ名によって、しゆくふくした。……2時には、50組くらいの夫婦が、私の家のテーブルについて、食事をした。

1846年、まだノーブーに住んでいたころ、父は、家のまわりに、ホースラディッシュを作っていて、近所のひょうばんだった。私は、ホ

ースラディッシュのにおいをかぐと、父とイリノイの家を思い出す。

家が焼きはらわれ、私たち家ぞくは、ノーブーを追われた。父は、し

クリスマスの

テッド・シール



ホースラディッシュ



ずかな声で、天のお父さまがまもり、みちびいて下さると言った。火事のおが、私たちのにげて行く道をてらした。

私たち家ぞくは、荷物をかついで、ほかの大ぜいの聖徒たちといっしょに歩き始めた。何百キロもはなれた、アイオワのカウンシルブラフスに着いたときには、みんなくたびれはてていたが、霊は元気だった。しかし、食物がとぼしかったせいで、多くの人が半病人になっていた。

父はモルモン大隊にとられ、ひとばんダンスや楽しいつどいをしてすごし、祈りをささげると、旅立って行った。

それからしばらくは大へんだった。母と、小さな妹のエイミーとルツ、そして私は、すばらしい友人たちに助けられて、どうにかミズーリ川をわたり、ウィンタークォータースに着いた。そして、そまつな家に住みついた。あのきれいな白い家とは、何とちがっていたことだろう。

そまつな食事、長時間のほねのおれる仕事、その上、父がいないのだ。母と目が合うと、私たちはにっこりして、「春になったら西へ」と言いかわした。そして、母は父がすきだっ

た聖句を暗しょうし、私たちは、讚美歌を歌い始めるのだった。

ある日のこと、私はりょうに出かけた。しばらく歩くと、見なれた草の葉が目に入った。私は、ひぎをついて、ひきぬいた。ホースラディッシュだ。根をしぼると、つんとはなをつくにおいがして、目になみだかにじんできた。私は、遠い地にいる父のことを思った。そして、なみだをふりはらって、つぶやいた。「父さんの、ホースラディッシュだ。」

私はひぎまずいて、祈った。「どうか、父さんをおまもり下さい。そして、また会えますように。どうか、母さんをしゅくふくして下さい。だんだん弱くなっていくようで、心配です。私をお助け下さい。家族を安全に西へつれて行くことができますように。」

私は、かかえられるかぎりのホースラディッシュをかかえると、家をめざして歩き始めた。

母は、道にすわりこんで、病気のおばさんの助けをしていた。私は歩いて行って、父がよくそうしたように、ホースラディッシュを高く持ち上げて見せた。

母は、家の中に入ってきて、なつ

かしいにおいがかぐと、ぱっと顔をかがやかせた。そして、父が帰ってきたのかと、あたりを見まわした。しかし、しばらくすると、母の顔からかがやきが消えた。母はそまつなベッドにすわりこんで、なきだした。

その夜は、ホースラディッシュは食べなかった。いっそうさびしきがかきたてられるからだった。

夕食のときは、だれもが口数が少なかったが、なぜ母がなみだをながすのか、妹たちにはわからなかった。

よく朝、私が目をさますと、母はもう、ホースラディッシュをみんなかめにつけこんでしまっていた。私たちは、父が帰ってきて、またみんなでくらすときまで、それをとっておくことにした。

秋がすぎて冬になり、川面をつめたい風がふき始めた。病と熱病がウインタークォータースをおそった。春がくるまでに、丘には600以上のものはかが立った。大半が子どものはかだった。

私たちは、外で遊んだり、イチゴをほしたりしてすごした。麦やミルク、卵などを、もらうこともあった。ウインタークォータースに着くのがおそかったので、私たちには、野菜

のしゅうかくがなかった。

初めのうち、だれもそんなことには気をとめなかったが、マラリヤや毒血症が出はじめると、しんこくに考えはじめた。大ぜいの子どもや大人が死んだ。私たちは何度も何度も祈った。「すべては善し」と歌うときには、みたまを強く感じたものだった。

昼はまだよかったが、夜は大へんだった。母と妹たちと私は、ひざまずいて祈った。来る夜も来る夜も、母のせきを聞いてすごさなければならなかった。

秋には、だれもが「クリスマスが来れば、いいことがあるよ」と言った。しかし、クリスマスまであと1日か2日になって、母はほんとうに



病気になり、起き上がることもできなくなってしまった。

母は、クリスマスにはごちそうを作りましようと言っていた。しかし、もう、りょうりをすることもできなかった。

私は、祈るどころか、だんだん元気をなくしていった。父からは、何か月も音きたがなかった。大ぜいの友だちが病気になり、死んでいった。私は、母が、父の知らないままに、死んでしまうのではないかと思った。

クリスマスの前夜、私は外へ出て行って、こおりついた地面に、ひざまずいた。風のうなるのが聞こえ、つめたいなみだが、私のほほをつたった。

「何回、祈ればいいんですか。」そう言ったとたんに、私ははずかしくなった。あの、私たちの世界が焼きはらわれた夜、父が言った言葉を思い出したのだった。私は、信仰をもって祈り始めた。

クリスマスの日は、晴れていた。聖さん会のあとで、クリスマスのごちそうが出された。とても、おいしそうなおいがした。私たちは、何も持って来なかったのも、とても心苦しかった。私は、ふとホースラデ

イッシュのことを思い出して、母に話した。そして、大急ぎで、家へ取りに帰った。私が出て行ったあとで、ハイラム・ランドルフという人が、兵隊に行った人々の手紙を持って、やってきた。母には、3通の手紙があった。その中には、愛と希望と、しゆくふくの言葉が、いっぱいつまっていた。

なんと、すばらしい日だったろう。七面鳥の上にホースラディッシュをのせて食べるなんて、聞いたこともないかも知れない。しかし、ほんとうにおいしかった。私も母も、父がすぐ近くにいるように感じた。

「それは何ですか？」ランドルフ兄弟がたずねた。

「ホースラディッシュです。ぼくが作ったんです。父さんみたいにじょうずじゃないけど。」

「ほう、これは毒血症にいいんですよ。知っていますか。」

「私にも、ホースラディッシュを下さい。」何人かの声がした。

私は、心の中で感謝の祈りをした。

「父さんからの手紙、それにホースラディッシュ」母はほほえんだ。

「そう、そして春になったら西へ。」私たちはそう言いかわした。

アントニオは、2年生のお友だちと、校庭のすみで、おしゃべりをしていました。アントニオは、大はしゃぎです。

リタが、くちびるにゆびをあてていました。「しっ、しずかに。□マ先生にきこえちゃうよ。」

「そうだよ。けいかくしなくちゃあ。」エドアルドが、いいました。

「なんのけいかくだい。」アントニオが、たずねました。

「□マ先生にあげる、クリスマスプレゼントのけいかくよ。先生を、おどろかせたいわね。」リタが、いいました。

「大きなプレゼントを、あげようよ。」

パブロが、いいました。

「でも、お金がないし。」とエドアルド。

すると、イザベルが、いいました。

「わたしのおねえちゃんが、ケーキをやってくれるわ。パンやさんと、はたらいているんですもの。」

「じゃあ、ほくたちはろうそくをもってこようよ。□マ先生のケーキには、きつとろうそくがたくさんいるよ。」

パブロが、いいました。

「わたし、赤いのもってくる。」

リタが、いいました。

「ほく、みどりの。」エドアルドも、いいました。

アントニオのろうそく

バージニア・G・ジョーンズ



ほかの子どもたちも、じぶんのもつてくるろうそくの色を、いいました。みんな、いいました。でも、アントニオはいいませんでした。おうちには、ろうそくがありませんでしたし、かうお金ももっていなかったのです。アントニオは、かなしくなりました。ロマ先生はやさしくて、大すきでした。

アントニオは、お友だちのところから、そつとにげだしました。ロマ先生のクリスマスケーキにかざるろうそくを、もってこられないとはいえなかったのです。アントニオは、おもい足どりで、おうちへかえっていきました。ろうそくのことばかり考えていたので、トカゲがいわのかけにかくれたのも、ユツカの花がさいているのも、目に入りませんでした。

アントニオが、ずっとだまりこくつているので、お母さんがいいました。「どうかしたの。アントニオ」

アントニオは、何もこたえず、ただかなしそうなかおをしていました。

つぎの日の朝、アントニオは、おべんとうをもって、「行ってきます」といいました。でも、学校には行きたくありませんでした。

ロマ先生にあげるろうそくがない！アントニオは、考えこみました。学校へ行かないで、あそんでいようかな、と思いました。そのうち、ふと見ると、大きな白い花をつけたユツカが目に入

りました。きれいだな、と思つたとたん、ぱつとひとつの考えがうかびました。

アントニオは、きれいな白い花のつたくきをおつて、そつと学校へもつて行きました。学校につくと、みんなはもう、きょうしつに入っていました。ドアのすきまから中をのぞいてみると、みんながもつてきたろうそくをかざつた、大きなケーキが見えました。ちょうどその時、リタがアントニオを見つけました。

「ろうそくは？ アントニオ。」

「はい、これ。」アントニオは、白い大きなユツカの花を、さし出しました。はずかしくて、どこかへかくなりたいような気もちでした。

みんな、しーんとしてしまいました。ロマ先生は、アントニオとユツカの花を見ていいました。「すてきなろうそくね。ユツカは、主のろうそくともいいうのよ。」そして、白い花のつたくきをうけとつて、高くかかげました。

子どもたちはみんな、はくしゆしました。

「アントニオ、いい考えじゃない。」イザベルがいいました。

ロマ先生が、アントニオの「ろうそく」——そうです、主のろうそくを手にもつて立っているのがとてもきれいだったので、アントニオも、うれしそうに、にっこりしました。

清い愛で結ばれるように

日本・韓国地域代表役員

菊地良彦



主 イエス・キリスト様のお誕生日をお祝い申し上げます。

私たちの救い主イエス・キリスト様が百合咲く彼方、ベツレヘムで世の救い主としてお生まれになられたとき、天の軍勢が御使いと共に天父を讃美して歌いました。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。(ルカ 2 : 14)

その時、地球の反対側、すなわち、現在のアメリカ大陸でも、そのしるし、救い主の降誕が示されたのです。

予言者ヒラマンの孫のニーファイに救い主は次のように言われました。

「頭をあげよ。元気を出せ。予言の成就する時は近づきたり。今夜そのしるし現われるべし。われはわが聖き予言者らの口を借りて言い伝えたるすべての事を必ず成就せしむることを世の人々に証明せんために明日世の中に来らん。われが自分の民の所に來るは、われが世の始めよりこのかた世の中の人に示したるすべての事を成就し、御父のこころも子のこころも行うためなり。われは神の力にて身ごもりたる故に御父のこころを行い、またわれは肉体をもつ故に子のこころを行う。見よ、時は近し、今夜そのしるしを現わすべし」と仰せになった。ニーファイの受けたこの言葉は言われた通り本当に事実となった。すなわち、日が入っても暗くならず、夜になっても暗くならなかったので民は驚いた。予言者たちの言

葉を信じなかった多くの人々は、これ信ずる人々を殺そうとして企てた大きな策が今は破れてしまったことを認めたので地に倒れて死んだようになった。予言の通りにしるしがすでに現われたので、民は神の御子(イエス・キリスト)が間もなく現われたもうに違いないことを悟った。要するに北の地にも南の地にも西の境から東の境にわたって、人々は皆驚いて地に倒れた。」

(III ニーファイ 1 : 13—17)

この主は、1820年の早春、天父なる神様と共に、少年ジョセフ・スミスにお現われになり、この末日聖徒イエス・キリスト教会、すなわち、イエス・キリスト様御自身の教会を再設立(1830年4月6日)なさったのです。

この主が、天の軍勢と共に、再び、戻って来られることを、私たちは知っています。イエス様が、再び、お帰りにされるまで、私たちの日本に「エノクの市の姉妹都市」すなわち、シオンのステーキ部が何百と組織されるように頑張らしましょう。また、私たちの家庭がより「清く」なるように努力しましょう。神様の清い愛で固く結ばれるように……。

イエス・キリスト様という「聖い鏡」の前にいつでも何らはじることなく立てるように、主の聖い教えを基として力強く生きましょう。

イエス・キリストの御名によりお祈り申し上げます。アーメン。

G・ホーマー・ダラム長老 七十人第一定員会会長会に 召される



先日開かれた10月総大会で、1976年
以来七十人第一定員会会員の職にあっ
たG・ホーマー・ダラム長老が、同定
員会会長会の一員として支持を受け、
先に十二使徒に召されたニール・A・
マックスウェル長老の空席を埋めた。

ダラム長老は心臓切開手術を受けた
ばかりで、支持を受けた時にはまだ入
院中だった。

ダラム長老は今年70歳、幹部として

の召しを受ける前は大学教育の権威者
として知られていた。アリゾナ州立大
学学長、ユタ大学副学長などの職を歴
任、最後の7年間はユタ高等教育委員
会コミッショナー、理事長として活躍
している。

七十人第一定員会会員としては、教
会歴史部ディレクターの任にあった。

ユードラ・ウィッツオー姉妹との間
には3人の子供がいる。

「聖徒の道」原稿募集

「聖徒の道」のローカルページにあな
たの記事を載せてみたいとは思いませ
んか。

どうぞ積極的にご投稿下さい。

◇信仰と証に関する体験について。

◇「ともに考える」ための主題を選んで、
あなたの気持ちを素直に述べて下さい。

◇聖餐会などの話で、全国の兄弟姉妹に
もぜひ紹介したいものを記事としてま
とめてみてはいかがでしょう。

◇ワード部、支部、ステーク部、伝道部、
地方部のたよりを、ぜひ紹介して下さい。
(どなたでも結構です)

◇十代の人の証、意見、声をどうぞお聞
かせ下さい。

◇若い世代の人々に与える両親や指導者
の言葉もお待ちしています。

◎氏名、年齢を明記のうえ、四〇〇字詰
原稿用紙五枚以内にとまとめて、左記宛
お送り下さい。

〒158 東京都世田谷区上用賀四一九―一九

末日聖徒イエス・キリスト教会

東京ディストリビューションセンター

「聖徒の道」編集部

なお、記事と一緒に写真やカットもお
送りいただけたら幸いです。

主の導きに感謝



大和ワード部
赤塚 けい子

私が両耳の聴力を失ったのは、まだ物心もつかない2歳の時でした。高熱を出したのが原因で、両耳がほとんど完全に聞こえなくなりました。その時から母の厳しい躰と聾学校での教育を受け、私は、独自の世界を生きてきました。20歳の時に改宗して以来、本当にたくさんの神様からの祝福を受けましたのでここに御紹介したいと思います。

横浜市立聾学校在学中の親友が病気で入院し、ちょうどそのお見舞いに行った時のことです。アメリカから来たふたりの宣教師が親友を見舞いに来られ、私は初めて宣教師に出逢いました。私は今でも私に教えて下さった宣教師の名前を覚えています。耳の聞こえない私と話がよく通じ合うターハム長老、メガネをかけたユーモアのあるクラーク長老です。そして横浜ワード部に通い、1カ月後の1972年11月24日にバプテスマを受けました。バプテスマを施して下さったのは松浦好輝兄弟、接手礼は祝福師の渡部正雄兄弟でした。しかし接手礼をしている間の言葉は私には聞こえません。けれども、渡部正雄兄弟の手から語っている言葉が頭骨へびびきわたってくるのです。本当に素晴らしい経験でした。もしこのことがなければ、福音を理解できなかったかもしれません。

バプテスマ会が終わると、出席して下さい

っていた兄弟から手紙をいただきました。手紙を読んでとてもうれしく思いました。その手紙には接手礼の言葉が筆記してありました。「耳の聞こえない姉妹のために何か出来ることがあれば幸いです。接手礼の言葉を聞きながら書きました。おめでとう。あなたの上に神様の祝福がありますように。」

私は涙を流して喜びました。バプテスマを受けてからホームティーチャーをつけていただき、その兄弟とおつき合いするようになりました。その兄弟は手話通訳を懸命にして下さり、私のために時間をとって福音を教えて下さいました。ある時、その兄弟から次のような言葉をかけられました。「あなたが好きです。でも私は伝道に出たいのです。あなたは耳が不自由でも、たくさんの神様の責任を受けることでしょう。あなたは、きっと22歳～23歳の間にふさわしい神権者と結ばれます。私はそれを信じています」と。

私はそれを聞いて大きなショックを受けました。本当に落胆し、悩みました。「教会を離れよう。どこか遠くへ行ってしまう」と思いました。そんな時、当時の横浜ワード部の浅間監督（現横浜ステキ部長）に私の悩みをありのままお話ししました。浅間監督は「あなたのまわりの兄弟姉妹の気持ちを考えてごらん下さい。どこか遠くへ行ってもまた思い出すでしょう。お母さんの

ことを考えなさい。置いて行くなんて親不孝ですよ。今、この場で耐え忍びなさい。耐え忍べば高く挙げられんと聖典に書いてあるでしょう。見てごらんなさい」とメモを渡して下さいました。私はそれを読んで心から悔い改めました。どこかへ行っても同じだわ。私の大好きなお母さん、小さい時から耳の聞こえない私をよく育ててくれたことを考えたら、ひとり置いて行くわけにはいかない。聖典を読みました。神様の言葉が心にしみこんできました。私は勇気づけられ、もう教会から離れまいと堅く決心しました。そして浅間監督に心から感謝しました。こうして気持ちを新たに、希望を持ってがんばりました。

初めて教会の責任をいただき、図書委員、扶助協会ホームメーキング活動教師、そして1年後にはステーキ部初等協会の開拓者、明るい少女アドバイザーとして働きました。耳の聞こえない私は神様に頼り、これらの責任を喜んで果たしました。しばらくして日曜学校に聾啞クラスが設けられ、私ひとりが先生と一緒に勉強することになりました。

こうして4月のワード部扶助協会のオープニングソシヤルの時、山形から来られた兄弟と知り合いました。とてもやさしそうな人に見えました。1年間ずっと手話を教えてさしあげました。その後、その兄弟は「耳の聞こえない姉妹のことをよく知りたいです」と言いました。そして「あなたのようにがんばって生きている人と結婚したい」と言いました。私は、あまりよくわかりませんでした。でも私も彼が好きでした。ホームメーキング活動教師を通して多くのことを学び、ふさわしい神権者と結婚したいと思うようになりました。やがて耳の不自由な私が恵まれて神権者と結婚することになりました。22歳の時でした。

前にあの兄弟の言われた言葉が現実となったのです。耐え忍べば高く挙げられるという聖句が本当になりました。一生懸命神様の責任を喜んで果たせば後で恵みが受けられることをはっきりと知りました。長い間の試練を乗り越えてようやく幸せをつかんだ気持ちがありました。

やがてふたりの男の子を授かり、1978年7月にハワイ神殿でエンダウメントを受け、夫婦と家族の永遠の結び固めをしました。言い表わせない大きな喜びを感じ、自分のそれまでの信仰と神様の愛を心から感謝しました。ハワイ神殿に行く前にふたりの子供が次々と病気になり、出発前に回復しましたが、今度はハワイに着いてから私が病気になるてしまいました。体の痛さをごまんしながらエンダウメントを受けました。耳の不自由な私のために相良姉妹（現名古屋伝道部長夫人）がつきっきりで通訳をして下さいました。ところが不思議なことに、エンダウメントを受けた後、痛みがまったくなくなりました。神殿は本当に素晴らしい神様の宮居であり、神様が生きておられることを証します。また神様が私の体を強くして下さいたことをとても感謝しています。そして愛を下さった神様に代わって多くの人々に愛を分かち与えたい、神様から与えられた証を人々に伝えたいという気持ちでした。毎日幸せな家庭を築き、3人の子供を育てるかたわら、大和ワード部扶助協会第二副会長として1年8カ月務め、現在大和ワード部初等協会会長として働いています。

神様の愛に見守られ、悩みから立ち直って希望を持ち、このように導かれて生活することができ、愛する父なる神に深く感謝しています。御手紙の署名のみ名により証します。アーメン。

未日聖徒仁不刊入教会
補和ワード部

付属図書館

